



くじら まんろく

愚人懣録

くじらまんろく

田辺井

目次

第一部

二

- オオジシン 二・おヨリ婆さんのところてん 三・アルファー波 四・近頃のレポーター
一五・アリラン忌 五・ロバートさんのこと 六・俳句について 七・コマーシャル
八・さゆり現象 九・日本人のウソ 一〇・新世紀へ向けて 一一・新ちゃんのこと
一二・官と民の公共性 一六・尋ね方 一六・潔癖性の千代田区 一七・カモさんとの
別離 一八・厚労省は迷路に嵌ったか 一九・福祉について 一九・リングの治療
二二・雲 二二・コロナピア号墜落 二二三・ある福祉活動推進員の意見 二三

第二部

二六

- 路頭 二六・ぼくの作曲(1) 二七・ぼくの作曲(2) 二八・ぼくの作曲(3)
二九・客人来訪 三〇・ぼくの作曲(4) 三一・アリラン忌 三二・聴風居 三四・変
じゃない? 三五・忙しいことはいいことだ 三六・老人会の方々と三七・酒井君元
気ですか 三八・名辞の宝庫「蘇東坡」 三九・真砂女さんを悼む 三九・みなさん
四一 研三氏来函 四二・命の声 四三・二句一章 四三・外科手術の発祥地は西洋か
四四・富貴寺の石段 四五・無為 四八・仕事人 四九・救急医療の今後は五

第三部

五二

第四部

- アイバンク設立の思い出 五二・U 専門員の思い出 五三・SARSの恐怖 五五・不在者投票 五六・ベトナム共和国の快拳 五七・SARS対策が動いている 五八・両子近況 五九・性懲りもなく六〇・ピートルズ雑感 六一・小柴博士の言葉 六三・移ろい 六四・久々の銀座 六五・顧慮 六六・諸々の神に 六六・名句誕生 六七・豆柿 六八・キムチのお話 六九・父 七一・父の俳句 七二・晩秋 七三・父に捧げる挽歌 七四・夢 七六・嫌煙の津波 七七・今日街角で 七八・医療法令と農地法令 七九・山茶花 八〇・バグダード陥落 八一・田園 八二・命 八三・街樹洞主人来居記念詠 八三・黄塵居主人来居記念詠 八四・修ちゃん挽歌 八五・台北 八七・深闇 八八・禁断の場所 八九・樟の木 九二・川のほとりに 九三・踏荆 九五

九九

- 郷里両子に遊ぶ 九九・雲 九九・U 課長への礼状 一〇一・夜の雨 一一〇・SARS 日本に上陸か！ 一一三・黄なる大地 一一三・不況対策（私ならいま何を） 一一四・初夏の雰囲気 一一五・エタノール 一一六・力愛不二について 一一七・自費出版について 一一八・「さようなら」を交わす別れ 一一九・短歌の面白さについて 一二〇・昔生活ありき 一二一・たかが体操？ 一二二・守旧派の論理横行 一二三・財源移譲の高慢理論 一二四・今日をもって新天地まる一年 一二四・いよいよ七月 一二六・「ウソ」が日本をダメにした 一二七・改革進まず 一二八・経常収支比率 一二九・在日韓

国人のママさん 一二二 ・ 七月も残り僅か 一二二 ・ 若き行政マンの勘違い 一二三 ・ 私
の感謝しているアーティストたち 一二三 ・ いろは歌 一二四 ・ 曼珠沙華 一三三

第五部

一三五

医療体系論として一言 一三五 ・ 官僚機構の欠陥露呈 一三八 ・ FA制について

一三八 ・ 路傍 一四一 ・ 壮大な取組 一四一 ・ 子供たち 一四二 ・ 上田閑照先生 一四五

・ アメリカの医療過誤対策 一四五 ・ イラク戦争 一四六 ・ サッカーアジア杯 一四七

・ 赤心亭の朝 一四八 ・ 師走 一四九

あとがき

一五一

愚ぐ人じん懣まん録ろく

田
辺

井

第一部

オオジシン

世間には、不満なことが多々ある。それを書き綴り、つれづれの慰めとしたい。

まず、いま使われている言葉の問題から。最近よく耳にするのに「大地震」がある。これを「オオジシン」と読む（読ませる）のである。そうすると、中地震は「ナカジシン」、小地震は「コジシン」と読んで一向に差し支えないだろう。この方式だと大逆転は当然にして、「オオギヤクテン」、大食漢は「オオシヨクカン」だから、大丈夫は「オオジョウブ」と読んでもだいじょうぶだ。

次に「目線」。私は古い造りの人間だから、「視線」と言つのが普通で、「目線」には俗っぽい響きを感じていた。しかし最近、それを権威ある某放送のアナウンサーまでが真面目な顔つきで喋っているのを見かけ、（私だけかもしれないが）むかつ腹が立つ。気に入らないので、テレビの前でひとりぶつぶつ言っていると、妻まで機嫌が悪くなってほんとに困っているのである。

冬大河およそ人語を寄せつけず

おヨリ婆さんのところてん

もうかれこれ四十年前も前のこと。おヨリ婆さんの店は山深い村の埃っぽい道路端にあつた。道路は勿論でこぼこ道。

店といつても、朽ちかけた掘つ建て小屋みたいなもので、中に入ると暗い土間があつて、カマドに鉄製の煤けた鍋が置いてあるだけ、そして土間に接して人の腰掛けられる低い板間があるくらいだった。

その店で唯一の商品は心太、ところてんだ。土間の隅に置いてある四角い缶の中に水を満たして沈めてあつた。

そんな店でも、夏になると子供たちには魅力的な場所だった。曾祖母に拝み込んで五円せしめると、喜び勇んでその店に行った。

少し上のヤンタケと呼ぶ店に行けばバラケラ（バラ売りのキャラメル）やニツケイガミ（肉桂紙）なども売つてたが、夏はやっぱりところてんだった。

「おばはん、ところてんのおくれ」

と注文すると、何の愛想もない婆さんは、

「そこん缶から好きなやつを取つち食べよ」

と応えた。ブヨブヨしたところてんを水から取り上げ、木筒で麵状に押し出して、ただ醤油を

かけて食った。その味の美味しかったこと……。喉を通る時、ほのかに立つ海草の香りがたまらなかつた。子供に五円の価値は大きかった。

アルファー波

手堅い某放送のアナウンサーは、すべてアルファー波の声をもつ人ばかりだと思っていたら、最近は何と朝から硬質でしかも早口のアナウンサーを擁している。「まだ、入りたてだろうから、そのうち慣れてくるだろう」と思っていたが、何日、何か月経つてもそのまま。誰も教育しないのだろうかと、最近は思うようになった。人はやさしい朝を迎えたいものだ。終日修羅場で働くには、せめて、朝だけでもやわらかな一時が欲しいと願うからである。このアナウンサーは、その辺のところであんなにやさしいのだ。

朝がそろそろ白みかける頃、遠くからニワトリの声が聞こえる。そして、トントンと一番起きの母が台所へと下りていく音がする。それを半眠りの状態でききながら、もう一度眠りにつき、やがて、元気に鳴く雀の声でしっかりと目覚める。どこからか、ラジオ体操の音も流れている。そんな朝はもうどこにもない。

だからこそ、アンノウンさん、早くアルファー波の声を習得して欲しい。

鶏鳴の夢うち砕き春の雷

近頃のレポーター

「うん、しこしこと歯ごたえがあつて……」と言いながら、若いレポーターが旅先で物を食べるのは、いまやテレビ番組の定番だ。こんな番組が数多く作られるのは、よほど視聴率を上げているか、気のきいたプロデューサーが、他の番組の穴埋めとして適当に作っているのだろう。

どんな階層をターゲットにしているのか、誰がこんな場面を喜ぶのか。僕の周りでは誰一人喜ぶ人がいないというのに。

むかしは、食べ物のことばかり言つてると、「ふげとれ」などと呼ばれ卑しまれていた。「清貧」、「プラトニック・ラブ」、「武士は食わねど高楊枝」などの言葉からも窺われるように、生理本能に近い行動ほど卑しいこととされていたようだ。物事を一步も二歩も理性の方へ踏み込んで考へて得た結論が尊く、自分の頭で考へることは徳につながるのだと考へられていたのかもしれない。

いまの日本の風俗、文化に思いを馳せるとき、こうした若いレポーターの食物探究紀行は、大いに参考となる。

田楽のしこしこと否まつたりと

アリアン忌

二月二十八日を「アリラン忌」と命名した顛末をここに記す。

「両子に一人の教師ありき、御名を財前豊弘といふ。山深き故郷を棄てず、三浦梅園を師と仰ぎ、数多の児童を育みはべりき。われ其の一人にして深く敬ぶものなり。先生は昔気質の、すなはち褒めて育つる人なりき。ともに喜び、ともに泣き、稀に叱る。一つ思ひいづることあり。何かの折、『うちはいつも銭が無えから、云々』と応へしに、ただ一言『余計なことは言ふな』とぞ。いま考ふるに、身内をば殊更卑下すべからず、との戒めと思へば、いまも恥づかしく然るにありがたく、先生の為人の俣はるる心地こそすれ。算盤、鶴亀算、ローマ字に人情等々、何一つ先生によらざるもの無し。昨己卯の年二月二十八日、先生みまかりぬ。はや一回忌を迎ふるに当たり、われもささやかなれど俳人なれば、先生の忌日を季語に留め年々に句を詠み、先生を永く讃へんと希ふものなり。すなはち『アリラン忌』とぞ名付く。先生昔朝鮮国に学びしか、小学卒業の折アリラン・コゲの唄を唱ひくれしことに因む。いま韓国文化にわが親しみ、アジアの人々との友好を望むも、先生に深くつながることなればなり。」私事ながら、先生との約四十年にわたる交流を記念しここに記す。いまの世相、いじめ、家庭内暴力、自殺等々を思つたび、先生に学んだ楽しい日々が懐かしい。

蟲いづる日をと待ちをりアリラン忌

ロバートさんのこと

アメリカ人のロバートさんは、四 歳くらいの私の知人で、私立の丁大学で講師をされておられる方だ。彼とは、ある講座の懇親会でビートルズの歌を熱唱し意気投合したのだが、彼との語らいのなかで特に印象深かったことがある。それは、「日本に来た頃、日本人が個人の偉大さを所属する集団や社会、ひいては国の誇りに結び付ける傾向があることに驚いた」との言葉だった。彼の発想では、アメリカで活躍する野茂が日本人の誇りとは理解できないが、野茂個人の偉業であることは分かる、となる。その逆に、日本人が、アメリカで恥さらしの事件を起こしたとしても、それはその人が悪いのであって日本人が悪いとは思わない、ともなる。私は、「なるほど」と思った。アメリカ人の言う「自由」を少し理解できた気がしたからである。それは、個人の行動はあくまで個人に帰するのであって、集団を傘にして目立つ行いをしてもらいたいして取り上げられない、ということになるだろう。彼の言葉を思い出すたび、何かの本で読んだ「デモクラシーは、キリストやアリストテレスを死に追いやったデモクラティズムとは異なるのだ」とのくだりを考えさせられる

炎帝を外に怒らせ午睡かな

俳句について

俳句は風流なもの、大半の人たちがそう考えているのではないかと思われるが、作り手からす

れば全く正反対の認識だ。

句ができない時などは、ノートに向かつて何時間も空の思考をしている時さえある。いまはある俳誌の編集長をしている遠藤若狭男さんと話した時など、私が「一月にいくらぐらい作るのですか」と聞くと、けろつとして「一五 句くらいかな」と言っていた。

彼はたしか、学校の教師をされているはずだが、仕事のほかに、一日平均五句作っているわけで、肉体労働の限界（私も短歌で約二年その経験をしたのでわかるが）のはずだ。作っても作っても、自分の気に入るもの、ひとに褒められるものはできるものではない。それでもなぜか作る衝動に駆られるのは、肉体的苦痛以外の何物でもない。そこには、自己顕示欲も何も入る隙間はない。ただ、作りたいから作るだけである。

救いといえば、気に入った句ができた時の自己充足感である。こうした無駄なような作業もすること、それが人間だけに天から与えられた特権でもあり、喜びでもあるのではないだろうか。もみくちやの反故そのままに麦茶のむ

コマーシャル

最近の気に食わないコマーシャルの双璧を挙げる。

は、お母さんがだめって言うんですよう。（責任転嫁型）

さーらりとした …… (作為的間延型)

責任転嫁型) 私的には、人を引き合いにし心理的雷同効果の方を狙うものをいう。しゃべりがわざとらしく、いわば、世論を形成して、従わない者には倫理的でないとの烙印を押そうとしている向きにもとれる。

作為的間延型) 早口傾向の間延から注目を狙うものをいう。この種の特徴は、コマーシャル中の歌を故意にメロデーを外したりスローダウンさせるといったものだが、視聴者はたいていその意図を見破り、怒りを覚えているに違いない。しかしである。時すでに遅しで、「視聴者が怒るのも、人の目を引いている点で一応の成功だ」との、作り手の術中に嵌まっているのである。

いまの子供たちは、テレビのこうしたコマーシャルに反応しながら感受性を培っていく。何か空恐ろしい未来を感じる。

まつはれる物鬱々と誘蛾燈

さゆり現象

演歌歌手に「さゆり現象」があるのをご存じだろうか。デビューの頃は初々しく、粗削りでファンを魅了していた若手女性歌手が、数年経つとなぜかしら石川さゆりもどきになってしまう。それをさゆり現象と呼んだ。

特徴は、「みえみえの品付け」、「おしきせがましい色気」、そして最も顕著なのが「年齢老け込み症候群」だ。「私はほら、こんな円熟した女、歌手なのよ」との傾向だ。

この現象が、奇しくも日本発祥の演歌の低落を象徴している、などと言つのではない。問題は、「演歌とは、歌手が聴き手である大衆のことを思い、大衆の悲喜を代弁するのが本道で、この現象は歌手が自らのことを大衆に誇示しようとしていること自体が全くの方向違いではないか」ということだ。

かつて、タレントがブラウン管の中ではしゃぎすぎて視聴者のひんしゆくを買っているのではないかと言ったが、さゆり現象はどれもこれと同一線上にあると思えるのである。

三波春夫が「お客さまは神様です」と自然に言っていたのを、いまの演歌歌手は忘れてしまったのだらうか。

亡びたるものつゆ知らず砂日傘

日本人のウン

ウンは泥棒の始まりだ、と子供たちには教える一方で、何かあることに何度となく頭を下げてきた大人たち。情けない光景だ。

人が見えないから渡る赤信号

特別割引は聞いてきた人だけに

赤字引受はそのため設立した子会社に

好況は黙秘で不況は消費者に

数え上げればきりもない日本の常識の数々。ここらで一週清算しませんか、すべて大衆にもお見通しのことなんです。二十一世紀はすぐそこなのに、こんなことしていると、子供たちにも、若者たちにも、僕ら大人たちにも未来が見えないのではないですか。

勉強ができるできない

お金を持っている持っていない

宗教だ 宗教だ

日本人だ外国人だ

こうした尺度で価値を量れない時代はすぐそこだ。求められるのは真心だけの時代ではないだろうか。

心底を見透かされぬて通し鴨

新世紀へ向けて

新帖二十号の発行を祝し、継続ということの大切さを実践、普及されたご労苦に敬意を表しま

す。このため、今回の稿は憑録ではなく祝録とします。

私事になりますが、散文を書く経験をほとんど私はもっていませんでした。そんな私に、この新帖は気軽に楽書しつつ多くのことを学べた点で、大変ありがたいものでした。

特に学んだのは、ひとりよがりではなくひとに読んでもらえる文章を書くのは難しい、ということとです。近頃私の思うことに、「人間は表現により相互交流し、表現は、例えば笑顔でも仕種でもスポーツでも、絵画、音楽、文芸等々、自分の行動であれば何でもよい。いまの複雑な社会のなかで、ひとは表現方法の取得に苦慮しており、また表現方法の急速な分化が却って、身近なところでの相互交流の空洞化を招いているのではないか」ということがあります。

こうしたなか、この新帖は多岐にわたる表現方法の公倍数としての位置を保ってきたと思います。文章では、スポーツでも音楽でも、仕事のことでも法律論でも、何でも表せるからです。要は、表現しようと思志するか否かにかかるだけだからです。二十一世紀は近い。しかし、来る世紀に私たちは何をしようとしているのか、こんな質問に、新帖は答えてくれることでしょう。

裸木となり新世紀見据えけり

新ちゃんのこと

僕の父の従弟にあたる新ちゃんは、自由きままな人生を送った人だった。

若い頃から奇抜な発想と、行動力に富んでいたらしく、マンガ家をめざして上京した。一時どこかの新聞にマンガを連載したとのことだが、その後有楽町に Z 企画なる小さな広告会社を立ち上げ、いくつかの子会社を独立させてこじんまりと経営していた。

新ちゃんの人脈は広く、M 商事の元大物会長 Y 氏もマージャン仲間であったときいていた。結婚などという面倒なものはないと言っていた新ちゃんは、その頑固を通し、ずっと独身をしていたが、十年前のある日会社を畳んでふらりと田舎に帰り、家を建て、近所の人たちに書道を教えたり読書したりと悠々自適な生活に入った。

しかし、人生とは儂いものだ。最近病気をして入院した、など風の噂に聴き始めてから数年、近頃、新ちゃんはあわただしく他界された。

木の香をいまだ発する自宅と、夥しい蔵書を遺してである。

蔵書は、雑学から、俳句、短歌、美術など多岐に及び、その好奇心旺盛な人となりを物語っていた。

自由きままな人生、しかしそれを田舎で終えようとの選択に、新ちゃんの内面の孤独がうかがえる。あわれをそそられるのである。

昨日、その形見分けとして、新潮古典集成の万葉集第二巻から第五巻、古今和歌集および本居宣長集、ならびに新ちゃんの所属していた臈句会の第一句集をいただいた。

それによれば、同会は広告界、ジャーナリズムに籍を置き、コピーライター、プランナー、編

集者など筆一本で生計を立てている面々により平成三年に発足させた句会だそうで、新ちゃんのほか井口氏、関氏、吉岡氏、金田氏、大森氏、草深氏、野村氏、佐藤氏および細谷氏の十名をメンバーとする、とある。

この会そのものが、すなわち新ちゃんの人生のステイタスだ。

ここに新ちゃんのいさぎよい生きざまを讃え、「木葉武者」と冠する全作品を掲げることとする。

「木葉武者」註／原文のまま記載

一椀の雑煮のぬき陰の膳

新年や裾の酔ふてる地唄舞

雪おろし越後訛りの声が交ふ

春昼の一番のバス峠越へ

道端の蝶は千草を諳んじる

思案して菜の花ひとつ後手に

かげろひて婆は鬼界をみて覚める

荷を解けば余生のありか山の春

写経する立場それぞれうかれ猫

春愁や盲僧の琵琶壇ノ浦

陰干の蛸は薄暑の軒の下
マスゲームアジサイになり園児服
抱接の蟾じつとして鍬の先
鬪鶏の尾羽の風車死して止む
炎天に因果いんがと鍛冶の音
民芸の竹編む指の月明り
巡查きてとぐる巻く蛇穴に入る
尼になるまよひの秋の薄き紅
白無垢やほろり黄落父の目に
盃盆会なべて遺影の微笑んで
木葉武者のごと斬らるる役
妻はまた瀬戸のもの買ふ年の市
廃船の半ば沈みて海枯るる
里神楽二間四方の神代かな
綿雪を数へて暮るる格子窓
煮凝やしがらみのこる鍋の底

合掌

官と民の公共性

官と民はどちらが公共性が高いのだろうか。「当たり前じゃないか、官は公務員がするんだから、官に決まってるじゃないか」そんな声がどこからか聞こえる。

しかし、よくよく考えてみると、官の施設は国民の税金で賄われている一方、民は国民の血税を使わず自ら資金を拠出し、官と同じサービスを提供する場合がある。例えば、病院のような施設の場合である。

そうすると、よほど民の施設の方がその犠牲的精神において公共性があるではないか、そんな気もするのである。

尋ね方

いまの若い人たち、特に女性では、ものを尋ねるときいともたやすく「～ですか?」となる。われわれ世代の者では「～でしょうか?」という場合の方が多いのではないだろうか。

これを考えてみるに、いまの世代の若者たちの合理性ともいうべき特性が浮き彫りになっている。前者では、尋ねられる側は年輩なのだから知っているのは当然、知ってれば教えるのが当然、ということになる。だからして、尋ねる側は何の苦勞もなく、ひとの苦勞して得た知識を貰うこ

となる。

一方、後者では、婉曲言い回しの中に「教えて貰うのは誠に恐縮ですが」との謙虚な姿勢とともに、「この質問は、私が自分の責任で処理するためのものですが」との責任感が伝わってくる。

この点につき時代的背景など深く詮索するつもりはないが、ただ、貧しさに育った世代と豊かに育った世代とがかくも乖離するのかと驚嘆し、ここに述べた次第である。

ありがたく隣家の柿もぎて去る

潔癖症の千代田区

路上禁煙違反で二千元とは驚きだ。喫煙が一般的に禁止されていない以上、喫煙行為自体が違法性を生じる理由はなく、喫煙により路上を汚した場合に違法性を生じるのだと思う。

こういう見地からすれば、行為そのものを罰する条例は憲法の基本的人権違反ではないか、そんな気がする。喫煙者全員が吸い殻を路上に捨てるとの性悪説に基づいた条例であるからだ。潔癖症は、いまわが国にじわじわと浸透していきつつあると感じているが、この *must not* のかつて行き着いたのが、戦争だったことを考えると、空恐ろしい気分になってくる。千代田区のストイックな法律屋さん、私どもはあなたがたの動向に注目していますよ。

木枯や法の網目の街路ゆく

カモさんとの別離

昨日、百歳のカモさんが退所された。

私とカモさんとは、喫煙の介助をめぐって少し内面的な不協和を感じていた。

それは、おそらくカモさんも同じで、カモさんの傲慢さを厳しい目で見つめた私の表情に自省したのか、これまで「先生！」と気軽に介助を求めているカモさんが、その後は私には介助を求めなくなっていた。

そんなこともあって、私にはお見送りの際に握手をどうかどうか幾ばくかのためらいがあった。しかし、思い切って両手を差し伸べ、「また来てくださいね」と話しかけた。

そんな私に、カモさんは「ありがとう、ありがとう」と何度も言いつつ涙を流して応え、都合四度も握手をしたほどだった。

私は、「やはり思い切って握手を求めてよかったな」と思った。自分と他人の間には deep river があると、作家の遠藤周作氏（故人）は述べておられるが、私はそうは言っても、その deep river が時に消滅する時があり、それが人間というものの面白さだと思う。

老人と関わりつつ、学ぶことの多い日々である。私の残生をこつした経験をもとに捻り多きものにしたものだ。「カモさん、まだまだ長生きをして、また逢いましょうね」

百歳の人を見送る小春かな

厚労省は迷路に嵌ったか

医療保険会計の収支悪化の現状を否定し、それを介護保険で賄おうとした旧厚生省。ところが、意外にこの制度が上手く機能するので、またまた医療保険の轍を踏むのではと危惧したのだろうか。制度発足ほぼ三年のこの定着期に、報酬の切り込みを始めたのだ。

そこには、高齢者の立場、使命感をもつて業務に従事している人々への配慮など微塵もないようだ。

道路財源や農業予算を削つても、この介護保険制度の予算を死守するのが、正しかったのではないか。

いつの頃からだろう。予算に心のぬくもりがなくなってしまったのは。昔は、各部署が理念に基づき、人々のためを思って既得予算枠の確保に全力を傾注したはずである。

官僚さん、どうか目覚めてください。いまでも多くの人々が、在宅での介護もままならず入所介護を求めて順番待ちを余儀なくされているのです。

みなさん方こそ、いま、その存立意義を自ら問うべき岐路にあるのではないのでしょうか。

寒垢離のはや限界の念仏かな

福祉について

福祉とは何か。辞書によれば、「さいわい、幸福」とある。快と不快の感情のうち、快の方を是とし追求する思想と言つてよいだろう。

しかし、このことには一つの矛盾を含むことに留意すべきだろう。それは、幸は不幸を前提とし、快は不快を前提とした相対概念である、ということである。すなわち、幸と快を言葉に発する時、人は暗黙のうち不幸あるいは不快の存在を肯定しなければならぬのである。

そのことは、上記の辞書の定義のみでは、人は各人の好き勝手に自己の快と思う方向へと行動してよい、との誤解を生じてしまつたということである。

したがつて、このことには必然的に、純粋な意志に基づく道徳的法則が要請されなければならない、ということが明らかになるだろう。

端的に締めくくれるほど、福祉の意味は浅いものではないだろうが、敢えて要約するとすれば、概ね次のようなことではないだろうか。

人は、「万民からは認められることを行わなければならない」との確固たる意志をもち、自律的に行為しなければならぬ。その行為こそが善であり、またその行為自体及びその過程をも包摂した総体的概念が福祉である。と。

すなわち、他人を愛すること、自らを律して行動すべきであること、人を思いやり謙虚に行動すべきであること等々、種々の宗教における「善の思想と法則性」のすべてを包摂したものが福祉の真の意味であると、私は考えるのである。

春立つや内に萌すを希望とも

〇 r i n g の治療

理事長からその治療を受けた。ぼくは嬉しかった。というのは、西洋の物理的治療が医療を凌駕するなかで、感覚的ながらその治療が東洋文化を融合していると思ったからだ。理事長のいうとおり、ぼくの指は〇をくずされなかつたり〇を容易く崩されもした。それは人間のこれまでの科学的知識では究明し得ないところのあるパワーが存在することを主張していたのだ。ある情報で免疫療法というのをきいたことがあるが、ぼくなりにもそれを解釈すれば、正常な状況が時間的経過のなかで癌に変異したとすれば、それを時間的に遡るような状況を加えれば元の正常な状態に戻るのが当たり前だ、という理論が成り立つということだと思う。

理屈はさておき、上述の理論に従うように、ぼくは体調を崩さないように一か月に一度指圧で自分の躰を労っている。要は、通常の状態に人があることが、最もひとつとして重要と思うからだ。

春を待つ頸がきしんでポキリとふ

雲

大空を流れるひとひらの雲から
何年も何年も誘われてきた

「なぜきみは、そんな暗い道ばかり歩いて、空を飛ぼうとしな
いんだい。」

「飛べよ、飛んで来いよ。」と
そしていま、ぼくは

空の雲にやっとなれた

みんな幼い頃そうだったように

大空を翔けるがよい

自由と闊達を取り戻すがよい
きつと再た

多くの友たちが迎えてくれるに
違いないから

そして今度こそ

みんなで手を取り合って

あの宇宙の果てまでも

自由に飛んでゆくがよい

コロンビア号墜落

千五百度という高温からか、それはまるで流れ星のように燃えつつ分解し、七人の若い乗員とともに落ちてきた。

命というものは何なのだろう。現状は凄まじい地獄なのだろうが、青空を落ちてくるさまは（不遜かもしれないが）崇高にも見えたのだ。彼らは、人類のために命を終え、あるいは終えようとしていたからだろう。こころより哀悼の意を表するしか術をもたない。

日の伸びし空を燃えつつ飛機が落つ

ある福祉活動推進委員の意見

福祉活動推進委員の委嘱を受けて第三回目の会議のことだ。私は福祉施設関係の委員として参加していたのだが、ついで意見の一致をみなかった、というのが率直な印象だ。

委員は、いわゆる民生委員や自治委員をなさっている方が主流なので、話題は生活保護や母子家庭、寝たきり老人見回りの話などが主体で、いわゆる施設サービスにはあまり理解も関心もな

いようだった。最後には、「施設は金儲けに走っているんで、……」等の発言が出る始末。

私は、こんななか、次のような発言でしめくくった。

「私は、まだ福祉について勉強中の身であるが、印象を述べさせていただくと、福祉はいまだＴ委員さんの言われたようにその概念が明確でなく、このため活動や対策が焦点ボケしている感がある。まず、私たちは福祉とは何か、との原点に立ち返る必要があるのではないかと思う。すなわち、憲法第二十五条の人が最低限の生活を保障されているということ、ということは近隣において困った人を見つけたときは援助の手を差し伸べるといふ単純なことである。そして、その視点から、いま我々でできることを重要なものから二、三点に絞って活動すべきではないか。

また、ここはいわば地域のハイレベルの会議だが、ここでは基となる理念を形成したりするのは当然意義のあることではあるうが、福祉が真に実現するのは、その理念を具現化するワーキンググループ、つまり若者たちの参加が欠かせない。若者の福祉参加を促すべく、例えば、自主的に活動する若者ボランティアを官の側でなく民の側から褒めてあげる、オンラインズしてあげる、見ている人が居るんだよと示してあげる、そんな役割と責任が我々にはあるのではないか。

また、施設は金儲け云々の批判があったが、私どもは地域に開かれた施設を目指しており、例えば小中高あるいは専門学校の児童学生を体験実習として受け入れているが、彼らから実習の感想文をもらった時はいつも感動する。というのは、そこにいま人がなくしてしまった涙の出会いがあったりして、人生における出会いの機会と場を提供できたのだとの実感が湧いてくるからで

ある。

施設には、そんなこともあることをご理解いただければ、もっともっと地域福祉のネットワークが広がっていくものと思う。…」

私は、自分の思っていることの半分くらいを述べて、この委員会がただの三回で終わってしまったのを残念に思った。本当の福祉はこれからみなさんと一丸となって進めなければ、ただの企画倒れになってしまうと危惧したからである。

忘れ雪納屋の軒下暗うして

第二部

路頭

自営業者等を被保険者とする国民健康保険については、数年前の法改正により、自治体が滞納者の保険証一時差止を行えるよう制度改正されたとのことで、これにより今、多くの人たちが医療を受けたくても受けられない状況に追い込まれている（保険料は通常、一世帯で年間四十～六十万円程度で無職の人や高齢者には過酷である。）とのことである。

保険証の一時差止については、全国の市町村の足並みは必ずしも揃っていないようだ。それは、「払う意志はあるが払えない人」と「払えるが払わない人」を峻別できなければ、本来生活保護に該当するような善良な国民を死に追いやったりする可能性があるからであり、その点で自治体の良心が機能しているのだろう。

本来、国民健康保険加入者の構成は、農林漁業者等の自営世帯を中心に仕事をもった人たちが大部分であったが、長引く不況による企業のリストラなどの影響もあって無職、つまり失業中で手当の支給期間を過ぎた状況下の人たちが流入し、その大半を占めるようになった。このため、保険料収入がいよいよ減少し、自治体の国保会計の赤字幅が拡大している、というのが実情であ

る。

いずれにしても、上記の「払えない人」と「払わない人」の峻別を早急に実施し、「払えない人」を生活保護等で援助できるような仕組み、さらに生活保護の手続き中の人には「緊急支援費（仮称）」を国保会計以外の福祉予算から措置するか、例えば、救急搬送患者の医療費については自治体の生活保護担当部局が保証する制度を確立するなどの対策が必要であろう。

冷血度を年々増している国の施策である。これに対処するには、財源配分も伴った真の意味での地方分権を確立し、住民が自らの手で地域に合った福祉基盤づくりを行う以外に道はないのかもしれない。

春寒し風は路頭に吹きすさび

ぼくの作曲（１）

作曲を始めたのは十六歳の頃で、ビートルズが流行り始めていました。当時、作曲をしていたのは、荒木一郎や加山雄三などで憧れの的でした。作曲すべく決定づけたのは、「想い出の渚」のザ・ワイルドワンズだったかもしれません。あの曲は素晴らしかったし、一方で自分の手にも届きそうな気がしたんです。

そして、ギターは弾いたので、まず、シロジニアカク、の「日の丸」くらいから、譜面に取り

組んだ気がします。ともかく、譜面を書けることが作曲家の必須条件でした。

最初に生まれた曲は、「さあ涙を拭いて」という、コードが三つくらいしかない曲でした。

自分の曲を自分で唱える、グループサウンズなどと対等だ、ってなわけで調子に乗りました。

それでも、作曲をするなら、*Y&Y&Y*など、当時二部形式と呼んでいましたが、基礎だけはわかった方がよいと思います。文章で言えば起承転結と同義語です。また、弱起の曲（休符から始まる曲）の意味くらいは……。

さあ、みなさん、今日から作曲を始めてみませんか。自己の感情を表現する、またそれで自ら癒されるなど、贅沢な時間つぶしですよ。

目借時わが曲に吾癒されて

ぼくの作曲（2）

兄も作曲を始め、ふたりで競争のように作り、またお互いに認めた曲は合唱し、テープレコーダーに録音していました。

当時のテープレコーダーは文字どおりぐるぐる巻きのテープを使ったもので、使い古すと、リールに最初に固定するためのテープの端がすぐによぼよぼになって、ぼろりと取れたりしました。それで、テープの端を弾力性のある丈夫なセロテープで強化したり、わけのわからないような

工夫をしていました。何せ、テレビのアンテナを物干し竿の先につけて、まいにち山の方向に向かって良い電波を探していた頃です。

さて、自分の曲にはそれぞれ自分だけの秘密が籠められています。

「たとえ悲しくても」の秘密。それはコード進行です。ビートルズの曲にセクシーセイディーというのがありますが、それに使われているコード、Gでいいますと、GからGのフラット、続いてBマイナーからC、D セブンスからGと循環するそのコード進行は画期的で、彼らがまさにビートルズたる真骨頂でした。

それで、それに心酔していたぼくは、自分の曲の中にそれを取り込んでひとりで悦に入っていた、というのが真相です。

そんなわけで、作曲を始めれば楽しみも増えますし、少なくとも作曲をしている時は「やさしい元の自分に戻れる」ということもあります。

さあ、みなさん、簡単な曲から一曲作ってみませんか。

青空をめざせ目指せと辛夷さく

ぼくの作曲(3)

いままでは、寝床に広告紙の切れ端とエンピツなどを置き、よれよれの五線譜を五行程度かい

ておき、あとはぼおーっとして、曲の浮かんでくるのを待ちました。

思いつくたび、それを譜面に落とすのです。ですから、メロディー主体と言っていていいかもしれません。

いまの若い人たちは、リズムから入る人が多いようですが、ぼくらの若い頃は、メロディーだけで歌って良いところのない曲は、曲として独立性がないと思ひこんでいましたので……。

でも、そうも言っていられません。いまのリズム感についても、見習うところは見習うべきでしょう。

それで、いま、まずドラムの譜面を作り、次にベースを作り、そのうえでメロディーと、いままでと全く逆のやり方で一曲作っている最中です。

どんな曲になることやら……。

春はやち年甲斐もなきシャウトにも

客人来訪

昨夜、苑の新人職員歓迎会があり、大変に盛り上がった。いつものことだが、元気のよい明るい職員たちで、ぼくはみんなが好きだ。

宴たけなわ過ぎる頃、宴は突如終わった。二時間厳守だからだ。

終わって外に出て、「次はどこなの？」と訊くと、「ありません」と誰かが言う。しかたないので、わが店「ソウル」へとひとりで直行した。

そこで、ぼくの歌「望郷」のハングゴ訳の添削をアイ氏にお願いした。

店は、なぜか韓国人の方ばかりで大盛況。そこで、コリアンエアーのキム氏と出会った。全く日本語がわからない彼であったが、ハングゴと英語で何とか会話が成り立った。

彼は、ぼくより三歳年上だったが、ぼくがハン・オベグニョンを唱い、またほぼ同年輩であったせいか親しくなった。

帰りしな、彼も別府だというので、一緒にタクシーに乗り、わが聴風居にご案内した。

居への二人目の外国人だった。またまたお酒のみ、エレキ（アンプなし）でLET IT BEを弾くなど、またしても盛り上がりすぎてしまった。

いま、大分は日韓交流の全盛期だと思う。ほんとに嬉しいかぎりだ。

ぼくがハングゴを始めた十年前は少数派であったが、いまは大手を振って歩ける。これから、ますます草の根交流を深めたいものである。

春一番まづ一献をキム氏へと

ぼくの作曲（4）

歌には、サビが重要なことはいうまでもないだ。だけど、ぼくの重要度は、そんな大それた代物ではない。

作曲でご飯を食べている人には難しい理論が必要かもしれないが、ぼくらアマにとつては、先に述べた文章の起承転結がそれを言い尽くしているように、少しだけ気分転換ができればそれでいいと思っている。

マイナー調が、ずっとマイナー調だと陰鬱なように、メジャー調ばかりでは楽しくなれない。それで、途中に気分転換を図らせるための配慮ともいえるだろう。

ぼくは、歌謡曲を作る場合では、次のことに気を付けている。

サビは、こせこせしないで盛り上がり調子であること、声をのばして大きな声をだせること、ひとに訴える調子であること、等々。

あとは、でき上がったら、何度も自分で唱ってみて、どんどん推敲していけばよいと思う。

梅咲いてほろり演歌が口を出づ

アリラン忌(2)

私の小学校時代の恩師、財前豊弘先生(故)、元安岐町教育委員長、元三浦梅園学会長)の忌日

二月二十八日を「アリラン忌」と呼ばせてもらっています。当然にして、ご家族の了承をいただいています。

先生には、小学校六年間のうち四年間を担任していただくという、誠に不思議な因縁でありました。私の字も、算数も、ローマ字も、倫理道德などすべてが先生の教育の賜と、いまでも感謝しています。

先生が、卒業の謝恩会の席で唱ってくれたのが、「アリランの唄」でした。朝鮮国の学校を出られていたためでしょう。

以来、約四十年間、私を見守ってください、時には職場まで訪ねてくれたほどです。先生をしのび、お礼の気持ちを含めて、ここに私の句を記します。

アリラン忌

師は黄泉に畑起しゐんアリラン忌
菜の花に躡つ来し方やアリラン忌
チゲ食へば未来明るしアリラン忌
よみがへるもの腹中に春子摘む
子らのぬめ古里の径いぬぶぐり
あしびきの満山しづか梅の花

菜の花の咲いて無人の谷地田かな

過去なべて分葱のぬたに尽きにけり

一村にしてわが視野に黄砂ふる

村棄てて三十余年つくし萌ゆ

老母の訛りのあはれ春炬燵

物芽ぶく気配の闇に狸鳴く

聴風居

聴風居は、一見わが家の一室にすぎませんが、そこはわが家ではありません。文人墨客や音楽人の来訪を歓迎し、また時に鶴見山の方から聞こえてくる風の音に耳を澄ます場所です。

この居では、無為ということも一つの楽しみです。何もせず躰を横たえていますと、風の音や町の音がよく聞こえてきます。また、増長した自分に気づくこともあります。

この居は、歌人の A 氏が来訪の折、次の一首とともに命名してくださいました。

聴風居に題す

別府湾の潮見え山よりの風を聴く君の住む家ともしきろかも

A 氏は、街樹洞主人と自ら称しておられます。

いま、文芸はどの方向へと進んでいるのか、これは私にとって大切な問題です。と申しますのは、文芸は古来から、人の心そのものであつたはず、つまり人の心がいずこへ向かおうとしているのかと同義であるからです。

こうした問題について、かつて正岡子規が獺祭書屋にて談義したように、みなさんとここで語らいたい。そして、楽しみたい。

そんな中から、答も出てくるかもしれません。

この居にはこれまで、N・M氏などの俳人や、歌人、へき地医療に携わるドクターである茶人や尺八奏者、またスナックで知り合つた韓国人の方など、さまざまな友人が来訪くださいました。

これからも、独立した居として多くの友を迎えたい、そして語らいの中から、文化の振興につながる何かを得られるならば、幸甚このうえないことであります。

春はやち四方にとよもすが居かな

変じゃない？

公務員の頃、民間人とアフターファイブするのに制約があつた。いま、民間人となって思うのだが、それはよく考えてみるとどうも偏見のような気がする。

自分たちは公務の側で民間人は営利の側だ、民間の人と飲むと打算に巻き込まれるかもしれない……。

こうした、性悪説志向に果たして日本の未来を託せるのだろうか。

世の中は、すべて平等な債権債務の世界で、いま営利の範疇とされるものも正当な契約により他に貢献しており、公務と民間営業の境がなくなりつつあることに気づいているのだろうか、そのように私には思えてならない。

いまは、新しい発想の時代だ。

公務員は、机に座っているのではなく、時間があれば率先して住民の中へ入っていき、真に住民の求めているニーズを把握すべき時代だと思っ。

開花前線すこし予報に上がるころ

忙しいことはいいことだ

四月へ向けて仕事が目白押しだ。頭の中に十項目程度が同時進行、その項目一つ一つがボリュームあるものだ。

でも、忙しいことはいいことだ。仕事に没頭していると、そこには感動がある。チームワークにより、それぞれの職員が仕事に励んでいる光景が、感謝の気持ちを伴って美しく見えるのだ。

みなさん、ありがとう。

ぼく自身に余裕がないので、固い表情になっているかもしれないけど、許してほしい。

さて、三日後の九日にはわが居に珍しい客人がある。東京に三十年近く勤務し、このほど退職して大分に帰ってくる方だ。

N 氏というのだが、東京時代には何かとお世話になり、ぼくはこの人をずっと尊敬している。

その全く気取らない生き方と、仕事には万全を期す職人気質、そしてユーモアとやさしさ。N 氏との会話は、その七割くらいが冗談で進むくらいだから。

良い酒と、地蛸、大根下ろし、先日実家の山で取ってきた椎茸と自然薯のとろろ汁でもてなそう。

梅の花目に入らぬほど忙しや

老人会の方々と

今日は、地元老人会連合会の役員さん方との懇談会です。地域保健医療・地域福祉・地域ケアネットワークの必要性などについて、意見を交わしたいと思っています。

地域の保健医療・地域福祉・地域ケア資源が、いかに理解され、いかに有効に住民のみなさまに利用していただけるのか、については、関係者が一緒になって考えていかなければなりません。

そんな意味で、少しでも地域のお役に立てば幸いです。では、今日も行ってまいります。

白木蓮の咲いてちよつぴり福祉人

酒井君元気ですか？

いま、香港ですか、シンセンですか？ 相変わらず、仕事に没頭のことと思います。

ほくも、頑張っていますので、ご心配なく。

この聴風居には、最近も多くの人が訪れていますよ。キンニクマンのコウノシヨウジ君も、よく来ます。

彼は、銀行を勇退して、いまメディア系の会社で頑張りがつ、グリーンツーリズムなど、相変わらず地域づくりに取り組んでいます。

お互い、少し年を取ってきたせいか、何か地域のお役に立ちたいと、そんなことを思う頃なのかもしれないですね。

このメッセージを見たら、また電話してください。

今度は、あの中国人の方ともしっかり話せるかもしれませんから。

では、ご活躍を祈る！

目借時ひやり車とすれ違ひ (車には気を付けて)

名辞の宝庫「蘇東坡」

中国の宗時代の詩人、蘇東坡は数々の名辞をその作品の中に遺している。ぼくの先生の故佐藤佐太郎が引用、というより発見したものでいえば、「蒼海何曾断地脈」や「生死夢三者無劣優」、さらに「窮達不到」などがある。

また、ぼくが好きなフレーズとしては、「澄邁駅通潮閣其二」の最後に「青山一髮是中原」というのがある。

これは、王安石との政争により人生の大半を流謫地に過した彼が、死の前年に海南島からの帰還を許され、船上から故郷を望んで詠んだ辞だからである。

この辞に、喜びや感動、深い過去を背負った人生の万感がこもっていると思うのである。むかしの詩人の辞句はまさに言霊であった、そんな気がしてならない。

黄塵の彼此さかひなき思ひかな

真砂女さんを悼む

今日の新聞で知ったのだが、昨日（平成十五年三月十四日）午後六時三十四分、あの偉大な俳人、鈴木真砂女さんが亡くなったそうだ。

真砂女さんは、ぼくにとつても尊敬する俳人だった。拙著「随想 風立つ村」にも書いたが、平成七年にぼくが東京勤務になり上京した時、某俳誌のN主宰が真砂女さんのお店「卯並」で歓迎会してくれた。

その頃は、大変お元気で、話が国東の椎茸のことなどに及んだ時、すっかりうち解けてぼくの隣にずっと腰をかけて話され、

「いいねえ国東は、ねえ、Nさん、今度の吟行会は是非国東に行こつよ」
などと、本気になって誘つておられた。

帰りしなには、NHK俳壇の台本に「自分の気に入っているという一句をペンで書いて、記念にとくださった。句は、

鯖火燃ゆねむりふかきは女かな
真砂女
である。

その後、ぼくは大分に帰庁したが、一度出張で上京した折、行きつけにしていた銀座のスナックのママから、

「この頃真砂女さんのお店には出てないそうよ」
ときいて寂しく思っていた。今日の記事を読み残念でならない。一昨年は能村登四郎氏がご逝去され、俳壇は次々に大物俳人を失ったことになるからだ。

真砂女さんの、俳句を究極まで追求した心の強さと、仕事が好きでいつまでも現役でいたいと

言っておられた純朴さを、ぼくは敬服していたのである。

いまは、心よりご冥福をお祈りするしかすべがない。

薇の煮付も過去となりにか

みなさん

戦争は、まだこれからのような様相ですが、お元気でしょうか。それぞれ日々の仕事に邁進されておられることと思います。

今日、私の目指していた一つの改革が収束しました。それは、仕事であるとともに、私の内部の改革でもありました。

人間には、強い自己と弱い自己が共存していますが、その弱い方の自己に一応うち勝つことができましたのであります。

自分の前には、まだまだ壮大な未来が数知れぬ課題とともに待ちかまえています。

しかし、私はひるむことなく一歩、一歩進みます。自己との闘いが今後とも続くでしょうが、頑張ります。みなさんも、どうかめげることなく頑張りましょう。

穴出でし蛇ゆ糸秩序欲りにけり

研三氏来函

俳人の能村研三氏が、昨日わが故郷国東半島の両子をひょっこり訪れ、懐かしく再会した。

氏とは、平成十二年二月に西子寺に建った父君登四郎氏の句碑「国東や枯れていづくも仏みち」を、その年の秋頃に氏が見に訪れたとき以来の再会だと思う。

父君は翌年に他界され、いまは氏が俳誌を継承主宰されている。

振り返れば、氏と最初に出会ったのは、昭和六十一年頃であり、その頃は私のまわりにも若手俳人がひしめいていた。いまは、それ相応に年を取り、そのうち氏を含めて三名が自分の俳誌をもち、その他の人は編集長など有力同人として活躍している。

私は、思うところあって、俳句から短歌に在所を換えたが、それでも俳句はいまでも私の生活の一部となっている。

自分の歴史が、それら文芸などを中心にしてつづられてきているからである。

自己の成長とは何だろう……？

そんなことを思うとき、どうしても文芸を抜きにしては答が出ない気がする。

何か一つでも、一生を通して打ち込めるものがあれば、それをめぐって何とか苦労も乗り越えて来れるものだと、この頃つくづくそう思う。

菜の花や父の碑見んと友来る

命の声

俳句や短歌を一言でいえば、「命の声」というのが妥当だろう。

生命は、意識現象の根底に息づく「ある流れ」であり、先人はそれを潜勢力とも呼んだ。したがって、本来目に見えない命を具現化、すなわち「表現」する方法は、言語や文字、あるいは芸術、仕事、身振り、動作等ということになり、その圧縮された究極の表現として俳句や短歌の作品が位置づけられると思つ。

佐藤佐太郎は、そのことに關し、「短歌の内容は如何にも一瞬一断片に過ぎないけれども、この一瞬一断片はそのまま事物の根底を把握し、永遠につながるものであるところの重量に充ちたものである事である」と言った。

作品は重い命の声である、ということと同義に解されよう。

私たちは、この「命の声」つまり命自体を大切にして生きてゆきたいものである。

いちめんに菜の花踊る故郷かな

二句一章

俳句の手法に、二句一章がある。いわゆる切れ字により（切れ字略型もある）生ぜしめられた

音律的小休止を挟み、二つの句が不即不離に響き合うことをいう。

二句の一つは、虚（心情・主体・自）であり、他の一つは実（事象・客体・他）である。

すなわち、二句一章の手法は、換言すれば虚実の手法である。そして、このことは、種々の身辺事にも示唆を与えてくれる。

不即不離……。実（客体）に即きすぎれば、作者の存在性を危ううし、客体をおろそかにして虚（主体）に即きすぎれば、観念論的独善に陥ることとなる。

俳句も短歌も同じく、虚実つまり主客が相互限定したかたちになるのを究極とし、そこにこそ妙味と困難さとを蔵するのであると思う。

黄砂降る旧知訪れ来るがに

外科手術の発祥地は西洋か

万葉集第五卷に、山上憶良の述べた面白い文章があるので、ご紹介したい。

「……。吾聞かく、前の代に多く良き医有りて、蒼生の病患を救療しき。（榆村、扁鵲、華他、秦の和緩、葛稚川、陶隱居、張仲景のごとくに至りては、皆是世に在りし良き医、除き癒さずといふこと無しといへり。扁鵲、姓は秦、字は越人、渤海郡の人なり。胸を剖き心を探りて易へて置き、投るるに神薬を以ちてすれば、即ち瘡（さ）めてつねのごとし。華他、字は元化、沛国の

誰（？）の人なり。若し病の結積して沈重内に在るあらむには、腸を剝（えぐ）りて病を取り、縫ひて復膏を摩る、四五日にして差（い）ゆ。件（い）の医を追ひ望むとも、敢へて及く所にあらじ。若し聖の医神しき薬に逢はば、仰ぎ願はくは、五蔵を割き剝り、百の病を抄き探り……」

と、記述されている。詳しく意識することは略したいが、要はこの記述から、外科手術が万葉の時代に既に東洋（中国）において行われていたことが推測される、ということである。

特に日本人は、西洋文化に対する畏敬心が強すぎるくらいが見受けられるのであるが、古文を少しひもとくならば、固定観念が果たして正しいのか、との自問に至るのではないかと思つ。

わがふるさとの偉人、三浦梅園は、享保時代の医師であるが、医業の傍ら、哲学をはじめ経済学や天文学、さらに文学（漢詩、和歌、俳句）にまで研究を極めている。

このうち、経済学の業績としては、著書「価原」において、西洋の有名なグレシャムの法則「悪貨は良貨を駆逐する」と同様の理論を、先だつて唱えていたことで知られている。

現在、西洋文化が優れていることは言うまでもない事実ではある。しかしながら、一方で私たちの属する東洋社会にも素晴らしい文化があつた、このことを銘記しておきたいのである。

黄塵や長江を見し日も遙か

富貴寺の石段

先日お会いした研三氏より、標題の件について書いてくれと言われていたので、ここで少し述べたい。

研三氏の父君登四郎氏の句碑「国東や枯れていづくも仏みち」がわが故郷の両子寺に建つたのは、平成十二年二月十九日のことであった。

この開眼式に、ご高齢の御身ながら登四郎氏は無理を押し出席してくださいました。前日から国東にみえ、その夜は句碑建立の世話人を務めた私の兄と私、地元の俳人一郎氏などごく小人数で登四郎氏歓迎の懇親会を催した。

懇親会は、氏の長女（研三氏の姉）にあたる方とお孫さんと、同行の俳人北川氏も同席され、国東の望海苑にてささやかに行った。氏のお躰に配慮してのことである。

さて、その懇親会の席で、氏が「明朝、富貴寺に詣でたい」と言われ、私が北川氏とともに自家用車でご案内することになった。兄は、開眼式の準備で行けないからである。

その日は朝から、予想もしないみぞれに見舞われた。山間部では雪という状況だった。

車をゆっくり走らせながら、国東の田舎道をご案内したが、氏は時々うなづくものの、ほとんど無口であった。春雪の降りしきる国東半島を老練な俳人の眼で観ておられたのである。

所々、道にも雪が積もっていて、一旦は引き返そうかとも思ったが、北川氏が「大丈夫よ、ねえ先生」と、何としても氏にお寺を見ていただきたい様子であったので、予定どおりにお寺へと向かった。

間もなくお寺の駐車場、それも真正面から春雪の富貴寺の参道が見える所に車を着けた。よもや、みぞれに濡れている石段を氏が上ろうとは思っていなかったからである。

しかし、その「よもや」の方であった。寺の庭まで上ると言われるのである。

氏は足腰が弱っておられ、やっと歩けるほどであったので、私の肩で左手を支えるようにして、一歩、……そしてまた一歩、という具合に、みぞれの降る中を三十分くらいかけて石段を上っていかれた。

やっとのことで庭までたどり着き、寺正面の石塔の礎石に腰掛けられた。寒いみぞれの中にある。

私は、俳句を極めた人の眼は何を捉えるのだろうか、そのことに関心があった。自分としては、春雪の中の静かな寺のたたずまい、あるいはカヤの古木に寺の歴史を詠み込むのだろうか、……などと思っていた。

しかし、氏は長い間寺の屋根の向こうに咲いている紅梅を見つめておられた。私は後に知ったのだが、老練な俳人は紅梅に春の光を観ておられたのであった。

その寺詣でが、私が登四郎氏に二度お会いしたうちの最後の出会いとなった。氏はこの年の翌年に他界された。

氏その折の作品と私の作品を次に記し、備忘録としたい。

「句集」羽化所収」

ひた走る国東の道雪もよひ
登四郎

雪の富貴寺石段のぼる力かな

春光のとほしかれども確とあり

「句集素心所収（予定）」

はるみぞれ古刹こんこん眠らしめ
風信子

ぼた雪の降るも一会や露の寺

春雪の仏みち来て句碑仰ぐ

無為

この言葉ほど、私に安らかさを与えてくれるものはない。心を検束なく自由に遊ばせるとき、
本当の自分を感じる。

思考の限界を、ある人は「思考の地平」と呼んで、その球体の外は実在さえも成り立たないことを示唆した。

人は自分を取り巻く物体界において思考する、つまり思考と事象との重なりにおいて人も物も実在する、という意味に解してよいだろう。

言い換えれば、その重なりにおいてこそ私は存在しているということになる。

若い頃、「自分は何のために生きているのか」と悩んだが、いまでは素直に上述のような実在観、自己の生命観を肯定している。

果たしてこれは成長だろうか、それとも妥協だろうか、その結論は出ないが、ともかく日一日を素直に過ごしたいものだと、いまはそのように感じている。

春深し国成るまへの混沌も

仕事人

みなさん、ごぶさたしています。その後お元気でしょうか。私も、仕事に追われながらも、お陰様で充実した毎日を過ごしています。

福祉の仕事は、なかなか大変です。自分が例えば、自分の都合で険しい顔になっていますと、その顔がそのまま施設の職員のイメージに受け取られ、サービス上好ましくありません。ですから、そんなことのまだまだ多い私は、職員としてまた人間として未熟だということになります。

人間は、なかなか成長しない動物のようです。しかし、夢と希望をもって、人に尽くせる一人前の人間になれるように日々精進していきたいと思えます。

いままで、短歌や音楽を自分のライフワークだと粋がってきましたが、その前にどうしても、

人に好かれる一人の仕事人でなければならぬと、この頃痛感しています。

私の作品は、これから、こうした心境のもとでの表現に脱皮していくことでしょう。作品の前に、まず一人の仕事人であるという……。

若葉はやかすかに風の音含む

救急医療の今後は

「『救急医療』の行政上の意義を答えなさい。」という問題が出されたとした場合、正解率はおそらく二十パーセントにも達しないだろう。

公務員でも三十パーセントを越えないものと思う。

それは、行政上の救急医療が休日や夜間の、いわば医療の時間的空白帯を補完するものに限定して組まれた事業だからである。

ところが、通常の救急医療といえは救急車により搬送された場合に施される医療を意味し、この点で行政の側と国民の側とで理解の相違を来しているのである。

この本となる原因は、「行政は公共の施策、つまり民間で行うことを期待できない不採算部門に係る施策しか行わない」とのちよっぴり思い上がった思想に基づいている。

しかしながら、現状では、医療において公と民との垣根は既に消滅しており、多くの民間病院

が高度ないわゆる第三次医療、第三次救急医療を展開している現状にある。

こうした現状を直視するとき、いまや、救急医療の概念を転換すべき時期が来ているのではないかと思う次第である。

国の描いた絵により、第三次救急医療施設が一県に一カ所しかないような状況のなか、こうした状況は速やかに打開すべく検討願いたいものである。

国の補助要綱が変わらない以上、施設整備費を助成してくれとまで民間は期待しないであろう。しかし、救急車搬送件数や医療の内容等を踏まえ、第三次医療施設を一県に少なくとも、東部、西部、南部及び北部で四カ所くらいは位置づけ、救急医療貢献謝金くらいの助成をすることは可能ではないだろうか。

国の指導一辺倒の時代は既に去った。地方から、新たな発想での事業の展開を期待したいものである。

目借時ごろ寝の犬も欠伸して

第三部

アイバンク協会設立の思い出

「もしもし、青木理事さんでしょうか？ 恥ずかしながらお尋ねしますが、アイバンクっていったいどんなことをするのでしょうか？」

昭和五十六年五月頃、アイバンクのことなら、長崎市内で眼鏡店をされている青木さんに尋ねた方がいいとの情報を受けて、ぼくのとった最初の行動であった。

課の中で、申請の出ている社団法人設立許可事案について、早くきりをつけるとの声が高まっていたのである。

当時の県医務課は、U 専門員の陣頭指揮のもと、いま課長になられてる O 先輩や Y さんなどの若手同僚が、毎日けんけんがくと仕事の議論を戦わせ、一見一触即発の雰囲気呈していた。

一カ月に百時間以上の残業などはざらで、それも手当は全くゼロという時代だった。

アイバンク協会設立の審査は、その後八月頃までに順調に進み、社団が県の参加による第三セクター方式でということであったので、当時の五百万円を基本財産に出捐すべく予算措置の

準備に入っていた。法人格取得後、眼球提供あつせん業の許可を必要としたので、予算は確か九月補正で対応したと思う。

法人を設立許可し、翌年の二月に入ると厚生省とのやりとりが最終局面を迎えていた。当時、県出身のN事務官が懇切丁寧に眼球提供あつせん業許可申請の指導をしてくれていたからだ。許可が下りたのは、三月上旬頃だったと思う。ぼくはその時ほど仕事で充実した気分を味わったことはない。仕事において、「白地に絵を描く」ということの面白さを知った瞬間ともいえる。

アイバンク協会は、いまでは腎バンクを併設し、障害をもつ方々に大きな貢献をしていると
きく。

振り返りみると、当時の行政は、担当する者にも大きな夢を与えつつ、ダイナミックに展開
をしていた、そんな気がするのである。

八重桜咲いて街路を親しうす

U 専門員の思い出

公務員時代に出会った人の中で、ぼくの最も尊敬しているのはU 専門員である。
専門員は、仕事には大変厳しい方で、常に、

「おまえたちは、勉強しなければだめだ」

というのを口癖にされていた。

法律の条文解釈などは、ほんの序の口で、政令、省令、行政実例、判例からさらに学説の傾向に至るまで、虱潰しに勉強せよ、といった具合であった。

仕事に厳しい専門員であったが、

「ほんとは、やさしい上司だな」

と気づいたことがある。それは、ぼくが仕事に追いまくられてパニック状態に陥っていた頃、突然、

「阿蘇野で歯科巡回診療があるので、従って来い」

との指示が出たときのことである。ぼくは、自分の担当でない仕事でのお供ということで訳がわからなかったが、指示に従い出張した。

前夜は、阿蘇野黒岳荘に宿泊し、例によりお酒とお説教に見舞われた。しかし、上司と遠慮なく話せたことで失いかけていた自信を取り戻せたといまでも思っている。

後で感じたことであるが、専門員は部下には間接的なかたちで苦勞を勞う人だった。ぼくのパニック状態を察知し、慰勞してくれたのであった。

当時、やり手の行政マンはサムライと形容されていたが、専門員はサムライ中のサムライで、救急医療体制の新設をはじめ、十数年かけての県立病院移転及び西部地区への公的病院誘致、

さらに老朽化していた赤十字病院のハード・ソフト両面にわたる改修など、数え切れないほどの医療行政施策を成し遂げられた。

ぼくは、いまでもU 専門員とその仲間の中で育まれたことを最も楽しい思い出とし、感謝している。

そして、行政が真に住民の立場に立って物を考えつつ、健全に機能していた頃が懐かしい。

風光るよき過去を良き未来へと

SARSの恐怖

トジシペーパーニハチコロセ……、こんな語呂合わせが昔あった。それは、今から四十年ほど前で、田舎でまだチフスや日本脳炎の死者が出ていた頃の「十一種法定伝染病」を暗記するためのものである。

ト（痘瘡）、ジ（ジフテリア）、シ（猩紅熱）、ペ（ペスト）、パ（パラチフス）、ニ（日本脳炎）、ハ（発疹チフス）、コ（コレラ）、ロ（流行性脳脊髄膜炎）、セ（赤痢）である。

この頃は、厚生省よりも一年早く誕生したという保健所が、これら伝染病撲滅や結核対策等に大いに辣腕を振るっていた時代といつてよいだろう。

時代の変遷に伴い、わが国においては、衛生対策の進歩や、医学医術の向上、生活水準の向

上等々相まって、伝染病という言葉さえ聞かなくなつた。

そして今は、以前各市町村に設置が義務付けられていた伝染病床はなくなり、ごく少数の感染症病床の運用を地域の医療機関に委託している状況である。

こうしたなか、保健所の役割は、その性格を伝染病対策から生活習慣病対策や健康増進対策へと大きくシフトしてきている。

そんな矢先、中国では不可思議な伝染病SARSが猛威を振るっているが、日本は果たして大丈夫なのだろうか。

伝染病に対する危機意識がほとんど皆無の状況のなか、また厚生行政が伝染病に無関心に近い状況に陥っているなか、SARS対策が進みつつあるのか危惧されてならない。

私たち国民も、ここでしっかりと国の対策が速やかに講じられるかどうか、関心をもたなければならぬだろう。

今では死語となつてしまった冒頭の語呂合わせが、この頃気になつてならない。

友いかに広東の春愛であしが

不在者投票

入所者さんによる市長選挙の不在者投票が行われた。みなさんは介護を必要とする身であつ

ても、とりわけ選挙ともなれば、自己の意志を大切にされる。

投票箱に一票を投ずる顔は、いつもより生き生きとしている。

介護保険制度の原点とは何か……。介護する人と介護される人との間に微塵の垣根もなく、ともに明るく人生を共有する、そんな制度であり続けることを心から願っている。

立会人をしつつ選挙管理人と交わした短い会話。

「こんな選挙があるからこそ、イラクのように戦争をしなくてすむのかもしれないですね」
「そうですね」

一票を投じ終へたる長閑かな

ベトナム共和国の快挙

経済的にそれほど豊かともいえないベトナム共和国において、新型コロナウイルス S A R S の原因といわれるコロナウイルスの分離に成功したとか。

世界の国々が、競って軍備拡張を行う雲行きの中なかで、この国の努力は賞賛されるべき朗報だと思ふ。

この頃、ますます疎ましく感じるのは、マスコミの付和雷同的傾向性と相変わらずの官密着型情報提供だ。

戦争といえは戦争の情報ばかり、不況といえは不況オンパレード、それも被害妄想的な発想で書かれたりするから、世の中がますます暗いイメージに包まれてしまう。

世の中には、ささやかでも親切な行動をしてる人がたくさんいるのだから、時にはそんなことも取り上げてほしい。

後者の官密着型には、頭を抱えてしまう。官は大半の民間による経済活動をほんの一部支えているだけなのに、あたかも官の予算が国の経済全体を左右している如く言う。これにより、官主民従の風潮が助長されるのである。

官が自らそう思いこんでしまう風潮を、である。

ベトナム共和国の、この快拳を機に、マスコミは猛省をし、真に国民の側に立った情報提供に努めてもらいたいものである。

晩春のおこぼれにして良き話

SARS対策が動いている

国や県等、また各医療機関においても対策は動いているようだ。やはり、わが国は医療の面で実績を保有する国だからであろう。

あるドクターによれば、ウイルスは寒い、乾燥した気候の場合に猛威を振るうのだそうで、

それからすると、いまは時期的にも有利なのかもしれない。

先にこの件についての懸念を書いたが、昨今こうした予想もしない病気が出現したりする環境条件にあること（動物のウイルスが突如人間に感染するのはBSE「狂牛病」も同じ）は確かだから、いま抑制されている結核やかつての伝染病などにも注意を払う必要があるのではないかと思う。

私は医師ではないので、推測しかできないが、ウイルスの病気は、ウイルスを一生物と考え、生態系の変化の及ぼす影響として研究していくべきであると思う。

このことは、私がある薬剤師から風邪によく効くという抗生物質を貰い、服用した後、帯状疱疹にかかって苦労したときに実感したことでもある。

私の躰の中の、生態系が一時的に変化したからだと実感したのである。

ともかく、施設機能は準備ができたようであるので、ウイルス自体の解明が進み、その弱点を早く掴んでほしいものである。

体内も体外もはや若葉光

両子近況

私の両子の生家では、いま椎茸の駒打ちを行っているようです。十人ほど人を雇って、何で

も通常の約二倍の十万個ほど打つとか。

兄の仕上げの大仕事となるのでしょうか。

駒を打った椎茸のほだ木は、現地の山に風通しの良いように組んで二年ほど寝かせます。ほだ木の上には、小枝等で覆いをして適度に日が差すように寝かせます。

ほだ木が仕上がりますと、起こして、杉林などに組み直します。そうすれば、あとは、春子と秋子の年二回の収穫があります。

椎茸作りは、かつて伊藤六郎氏が「豊後ナバ山唄」という短編小説に書いたように、「ナバ作り」といわれて、大分の主要な産業でした。

私の古里両子でも、祖父の時代からの事業で、田舎では現金獲得のできる数少ない仕事の一つです。

山村は、これからのどのような歴史を築いていくのでしょうか。それは私にもわかりませんが、古里の集落のあの静かなたたずまいと、緩やかな時間、人と人との絆が、農林業とともにずっと続いてほしいと願うばかりです。

黄金週間といふといへどもごろ寝かな

性懲りもなく

ある地方団体がまたつまらない昇任ごっこをしてるようです。八割かたが無駄なこんなゲームは、もう救いようありません。

いまの時代は、ある意味で幕末と同じだと思います。心ある者が真の住民自治に向けて頑張らなくてはなりません。

私は、かれこれ十年ほど前から高杉晋作や坂本龍馬のような気概（みな純粹な若者でした。）に燃えていました。いまも同じです。みなさん、身近なところから草の根運動を展開し、いい世の中を作っていきましょう。

経済学者（修士や博士ぞろいですが）が経済をどうにもできない、政治家は税金から政治資金をもらいながら相変わらず企業献金を求める、流通体制は嘘の表示で流通を続ける、銀行は不良債権（大方が怖い人たち）を精算できず、中小企業にお金を回さない……。

いま、国家は民間企業に例えれば倒産状態ですが、まだ偏差値優遇性のマインドコントロールから解かれていません。

さあ、みんなでめげず明るい社会の構築に向けて立ち上がりましょう。いまはゼロの位置に立っているのですから。

みんないつまで眠ってるんだい若葉寒

ビートルズは、僕の青春とともにありました。あの頃感じた印象は、次のとおりです。

【All my loving】～甘酸っぱい感じで、何度聞いても胸が熱くなった。何回聞き、何回自分でも歌ったかわからないほど。

【Paperback writer】～これを聞いている頃、ビートルズが日本にやってきた。実演はレコードほどではなかったが、ほんとうに日本に来てるんだと感動した。

【No reply】～青春そのもの。自分の失恋と重ね合わせていた。

【Rock & Roll Music】～初めてロックなるものを知った。自分のこれまでの音楽観を根底から覆した。

【Get back】～このリズム、いまでも僕は生バンドでこれを唱うのが夢だ。

【Let it be】～いまでも、作曲をする時自分の根底にあるもの。考え方も含めて。

【Don't let me down】～いまのポップスはこれを見習うべき。あまりに技巧に走りすぎ、根底を見失っている気がする。

【All you need is love】～この曲がヒットしている頃、衛星中継なるものが始まり、この曲が流れた。

【Mother Nature's Son】～独特のバラード。これでヨーロッパへの夢を膨らませた。

【I've gotta Feeling】～形容できない、何度聞いても体が動く。

【The long and winding road】～僕の人生の方向さえ暗示した。

「When I'm sixty four」〜ロックグループがクラシックを取り入れたものと感服。ミッシェルやエリナーリグビーも。僕もこれからの作曲に生かしたい。

「She loves you」〜この頃の恋心を代弁してくれていたのかも。

「If I fall」〜バラードの究極。

「No where man」〜僕を芸術方向へと導いてくれた曲。渋谷のスタンドバー「ハーモニー」でギター片手に歌って受けた。

「While my guitar gently weeps」〜この曲を置いている、ビートルズを、またジョージハリソンを語れないうつぬ。

「Yellow submarine」〜この曲もゴットだったのですよ。

「And I love her」〜この曲も渋谷で歌った。

書けども書けどもきりがありません。ビートルズは、例えばアルバムのアビーロードの曲の切れ端、Her majesty is a pretty nice girl but she doesn't have a lot to say……、なども聞き逃やず丸暗記するほどのですか。(一応終わり)

小柴博士の言葉

博士の素朴な語りに感動、反省しました。それは、

「自分の仕事に本気になると、楽しくなるよ。」
です。

移ろい

熱し冷め

心はいつも

移ろいの中

そのこと自体が

吾という

思考する何かの

客体となつて

吾は移ろいを

寂しむ

きつとこれは

季節の刻みの中で

生じる

幻のような

感情だろう

それにしても

この寂しさは

深い

久々の銀座

ママの店に行き、案内付きでマスターの店に行き再会、またママの店に引き返すなど、懐かしい一夜でした。思えば、銀座アシベにてテンプターズを観たのは、昭和四十五年ですから、銀座の思出はかれこれ三十二年もの長きにわたります。私の人生に大きく影響を与えてきた街です。並木通りはすでに初秋の趣でした。

新秋の並木通りを徘徊す

玉ノ露つゆもしとどに泥酔す

顧慮

二 二年を顧みるに、あの四丁六月はまるで夢のようだ。それも予定されていたものと今では思える。長年培ってきたものがいつしか金属疲労を起こし、価値観の違う状況へと変化する、まさにヘーゲルの唱えた止揚のようであった。今はこれも予定されていたように、福祉の世界へ転身し充実している。私が人生において一度は学ばねばならなかった分野であると思う。もとより微力であるので、どのくらい人に地域に貢献できるのか、それはわからない。しかし、力尽きるまで努力していこうと思う。

諸々の神に

あなたがたが

それぞれの信者を守る限り

あなたがたを批判しません

ですから神々どうし

いがみ合わないでほしい

地獄を造らないでほしい

あなたがたは

人間に戦えというのですか
殺し合えと教えるのですか

どんな幼子にも

戦いが無益なことは
わかっているのです

あなたがたが

本来の心にもどって
戦いを止めてください

名句誕生

わが古里において活動している句会、「れんけい句会」に名句が誕生しました。約十年の活

動の成果でしょう。また、句会員のメンバーの一人林さんが沖の同人に推挙されました。林さん、心からお祝い申し上げます。おめでとございませう。これからまた、地域の文化向上にご尽力をお願いします。

(名句)

火のやうな咳しづまりし夕仏間

田辺博充

豆柿

俺の田舎の

豆柿はもう

小さな谷の

かたはらに

熟れてるだらうか

街に

いつしか住んで

ふる里を

夢にしちまつた

戻れるものか

家から少し

下つた道端

そこにはきつと

ゲンノシヨウコモ

すがれてゐやう

キムチのお話

いまでは流行りのキムチだが、四十年前前は「朝鮮漬け」と呼んで、そんなに知られていなかった。

そんなキムチをめぐって苦い思い出がある。

わが生家の近くに、ケンさんという韓国生まれの方が住んでおられた。姓はキムさんといって、何でも韓国では名門の家とのことだった。そんなケンさんが、村に引っ越してきた時、当

時田舎の村議をしていた僕の祖父に土地の斡旋を求めたらしく、祖父は、ケンさんに国東半島中央に位置する函子寺から一キロほど下ったところに、知人の土地を借りてあげ、住まわせてあげたのだと僕の母は言う。

そんなこともあつてか、冬になるとよくキムチをくれた。僕たち子供もおそろおそろそれを食べた。

しかし、とてつもない辛さにもかかわらずその美味しいこと。辛さのあまり染みていない白菜のぱりつとした歯ごたえと、その香りがいまでも忘れられない。

当時は、戦後でもあり、差別や偏見が横行していたこともあつて、ケンさん家族は祖父が死んで間もなく、どこかへ引越していった。

そのずつつと後、僕は、ある飲み屋でケンさんの娘に遭遇したことがある。懐かしくて「たまには古里に帰ったら」と勧めた。すると彼女は、「あんな所はいい思い出なんて少しもない、古里とは思っていない」と言った。

僕は愕然とし、自分の無知を羞じ、彼女に当時の社会そのものの非礼を代表して詫びた。彼女は僕の古里から深い傷を負わされていたのである。

いま、僕は拙くもハングルを少しずつ勉強しており、いつか韓国にわたり、わが人生において「喉に刺さった棘」のようになっている過去を、少しでも精算したいと思っている。

歴史は、時に無知で、かつむごいことを平気でやってのける。新しい世紀に生きる僕らは、

常にこのことを自覚し、理性に基づき、愛と平等と自由に満ちた生き方を模索していかなければならぬと思う。毎冬キムチを食べるたびに、こんな思い出とともに、ケンさんが病に臥せった祖父の枕元で「マナブさん、わりいか。ママ食べんと死ぬどー」と励ましたという、その律儀さなどを思い起こしている。

キムチ食ふわが増長を封じ込め

父

父が死んだ

やすらかに

眠るやうに

その一生は

怒濤から風への

見事な転換だった

父が死んだ

時に酒におぼれ

退廃を見せつけ

その一生は

周囲の者たちを

落胆させ思考せしめた

父が死んだ

やすらかに

眠るやうに

その一生は

起死回生を実証し

微かな希望も与へた

父の俳句

竜胆のみち延々と苦死の夢

乳牛の背なる白地に蝶の影

蜜柑投げ微笑むのみの恋なりき

遠くよりシヨールを外しにこやかに
初刷に全てをかけて吾子小春

晩秋

あーかい夕日が
刈田にさして

藁塚さむく暮るる頃

はしやぎほつけた

子らは口々に

お腹すいたと帰りゆく

山里の秋は

そりや短かくて

柿もたちまち熟して落ちた

チャンバラごっこで

ふざけた子らも

家に帰ればよい子です

あーかい夕日の

さす藁塚に

凭れてハーマニカ吹いた父

近頃家に

臥せつてゐたが

きのふぼつんと死にました

父に捧げる挽歌

つつましく父はゆきたり失語せしより訪ね来る人の少く
海村に生れし父にていつしかに海に隔たるこの家に逝く
やすらかに眼を閉ぢし父泥々としたるかつての面影はなし
茫茫と時は過ぎたり眼前にみ骨となりし父を見しとき
美しきみ骨と寝むるうからも命の果てを弔へるらし
あられなき羞の極みを見しめしが死したる顔は仙人に似る

この父のありてわが在る当然がみまかりしかば心底にしむ
養子ゆゑ生きに迷ひし父かとも酒に溺れし半生あはれ
竜胆の咲く黄泉のみち行きなされ一たび発てば戻り得ぬ道
いづくより来りいづくへゆく生か父から吾へ血脈継ぎて
大いなる起伏のありしこの年か父逝きまして忽ち晩れん
心身の分離のかたちあはれなりみ骨といふも瓦礫のごとし
癌除りしことつゆ知らず逝かししが安らげき顔みつつ諾ふ
父逝きしゆゑ安からん看取りたる母および義姉責全うし
稲刈の鎌さし上げてかたはらの柿取りくれし父なりき嗚呼
いたはりし祖母逝きてより七年余後を追ふがに父永眠す
いまの代の野辺の送りぞ父の亡骸運ぶ柩車の後を従き行く
父の家ありし証の短刀を受け継ぎしわれ伝へてゆかん
くぐみつつ泣きある叔父もこの日頃老著し白髪となり
父逝けばその家も亦わが内に遙けくなりしことぞ悲しき
小熊毛の貧しき渚村いでて両子の土になりたり父は
易々と逆立をせし父にして幼きわれはそれを誇りき
遠どほに吹く風の音あさまだき床に目覚めて父をおもひつ

さながらに起死回生を実証し父は半生を淨く生きたり
餅好きの父ぞしのばゆ十ほどをいともけるりと平らげにけり
しんしんと更けゆく夜の臥床にて父をおもへりいま亡き父を
氣象士を直指ししといふ父にして農になじまず農として逝く
柚子の實の腐れゆくころかたはらの墓に入らんみまかりし父
一つびとつの滋養を言ひて幼き日父はわれらに物食はせけり
御靈はや冥王星の辺りかもかかるおもひに星空あふぐ

夢

いつになつても夢はあるものだ。若い頃は、南方の島に住んでみたいと思っていた。

勤め始めてからは、全く余裕なく仕事に没頭する日々ななかで、一生のうちに必ず百姓に戻り、子供の頃のように川辺に住んで、鶏の声で朝を迎えたいなどと。

また全く別の夢として生バンドをバックにゲットバックを唄ってみたい、春風のなかバイクを飛ばして旅をしてみたい、などもあった。

いまは、やはり少し歳をとったせいか、韓国へ仏教文化探索の旅をし、民家に泊まってお年寄りと話をしたり韓国民謡の「恨五百年（ハン・オベグニヨン）」を唱いたい、というアジア

草の根交流や、古くさいかもしれないが四国八十八カ所の札所巡りをしてみたいなど思っている。

夢は素晴らしい、夢があるからこそ日々を楽しめるから。これからも、どんなものでもよいので、夢をもって歩もう。

菜の花のみち延々と夢無尽

嫌煙の津波

遠く北欧に発したとも思われる嫌煙の津波が、いま、じわりじわりと身近にせまっている。

タバコは、躰に悪いのだと合唱するこの津波は、ぼくら愛煙家を今にもつるし上げ、力で踏み絵を押しせよとしている。

今までは、「葉タバコ農家の支援のために」などと冗談を言いながら吸っていたが、もうそんなことも通用しないようだ。

躰に悪いことって、ほかにもあるのではないだろうか。日本社会の根底を蝕む「いじめ構造」等々……。

ああ……、そろそろ無条件降伏の時か……。

涅槃西風無煙信者に降伏す

今日街角で

アロエの花を見かけました。この花は、朱色の花房を聖火のように天にかかっています。この日本的でない花を歌に詠もうとしたのですが、うまくいきません。次に掲げ、推敲していきます。

あさ春の道のかたはら花房の朱をかがけてアロエ花咲く

たとえば、比喩に暗喩と明喩（直喩）がありますが、暗喩でいきますと、

浅春のみちに力のみなぎりて拳をかがぐアロエの花は
のように、直喩ですと、

あさ春の道にさながらくれなゐの拳かかけてアロエ花咲く

などとなりますが、はたしてどれがよいのやら……。

「あさ春」「道」などが意味を持ちすぎていて煩わしいので、少しフィクションを入れて次のようにしたらどうだろう……。

明るみてゆく朝空へくれなゐの拳かかけてアロエ花さく

（確定）調子が強く、比喩もあまり気にならないので次を取ります。

浅春のみちに力のみなぎりて拳をかがぐアロエの花は

医療法令と農地法令

一見何の関係もないようなこの二つの法体系であるが、何とその変遷においてはよく似ているのである。

どちらも、第二次大戦後から発展していった法体系であるが、医療法関係では、戦後はまず医療施設の量的拡大から始まる。

医療法（医療施設法といわれる。）は、こうして一定基準を満たせば病院として許可、診療所は届出でよいということ、施設を増やすことに心血を注いだ。

しかしながら、量的確保をほぼ成し遂げた（と思われる）昭和六十年代になって、医療の質的向上つまり中身を問う議論が巻き起こり、その結果、医療法により、県に医療計画の策定を義務づけることになるのである。

それと併せて、社会の高齢化進展等により老人保健施設や療養型病床群が医療法に盛り込まれることになるが、そのことについてはここでは割愛したい。

一方の農地法令であるが、土地改良法により農地の拡大を図りつつ、開発の必要のあるものについては（一件ごとの申請に基づき）農地法で転用を許可するかどうかを判断する、いわゆる受動的農地統制のかたちをとった。

ところが、経済の高度成長等に伴い国土の乱開発が懸念されるに至り、農振地域の整備に関

する法律、いわゆる農振法が施行され、同法により国・県・市町村は農振地域整備計画や農用地利用計画等を作成し、それに基づき計画的に農地を確保、有効利用しようとする能動的統制へと移行していくのである。

この二つの法令の変遷からも明らかのように、現在は何事においても質的充実が求められている時代である。

しかし、私が最も興味深いと思っているのは、法令というものは、もしかしてであるが、こうした量的拡大から質的充実へと進化していくのが通常のパターンなのではないのだろうか、ということである。

私は今後、こうした視点から、介護法令の変遷を見つめていきたいと思っている。

法令も季も移ろひ四月尽

山茶花

さざんかの

花さらさらと

地にこぼれ

今年も残り

わづかとなつた

古里に

病み臥す父の
躰はやせて
あの思ひ出が
また遠のいた

茶の花の

白さ寂しよ

畑のべの

石垣もまた

つめたくなつた

バグダード陥落

木蓮の紫ほどけ真砂女逝く

春灯のたまゆら吾に点りけり
媼逝く弥生のそらの蒼の涯
天翔けしをみなの一生涯なり
落花はや昭和の御代を遙にす
杳々と未来の香のす花菜汁
鶴折つて媼に春を届けけり
チユリツプその単簡をいまも愛づ
黄砂降る午後バグダード陥落す
菜の花や父の碑見んと友来る

田園

田園は荒れなんとせり春の夢
菜の花の咲けり農事の人を見ず
父いまは亡しこの山に蕨摘む
目借時一から三へ時が飛ぶ
董さく故山の過去に浸りけり

その青は空の賜物犬ふぐり

春宵の雨一つまた訃報あり（山田氏ご逝去を悼む）

いちめんに菜の花踊る故郷かな

この村に還る人待ち田芹摘む

黄塵の彼此さかひなき思ひかな

命

物芽吹くおくの奥処の命とも

断ち切れぬもの見せつけて蝌蚪の紐

ひたぶるに嗚呼かく花の盛りかな

花の昼子らに押されて車椅子

いのちかな春風頬を撫でて去る

街樹洞主人来居記念詠

平成十年街樹洞主人が来郷された折、大山町、日田市や

中津市などへと同行す。秋光爽やかにしてよき旅を得。

昼くらし杉林の中の道いでて刈田は秋の気の澄みわたる
いく枚の棚田に秋日さしをりて寂しきものか人なき道は
秋たくる山田の畦に自生して梅鉢草のしろじろと咲く
日のおたる刈田しづけく嘗々と山田を保つ人々あはれ
しばらくは上りてくだり来る道に一連の風棚田より吹く
ゆきずりの道よめな咲き農繁期の終れば寂し刈田も小屋も
午後の日の軟かにして山峡の畑に咲きゐる野蒜にも照る
懐しき人にしたがひ自らも行人として秋日にひたる
再会も花かへり咲く梅の木もころにしむる山の畑に
しがらみのなき身の軽く梅返り咲く山畑に秋の日を浴む
分間浦と曾ていひしか和間といふ防砂林より奥の草原
先生の字に万葉の歌刻むいしぶみを読む曾ての浜に

黄塵居主人来居記念詠

平成十年黄塵居主人来居、星降る夜ともに歓談す。翌日
国東半島をともに巡る。小雨、霰、霰といふも亦愉し。

峠越え村に入る時ゆくりなく不構常心たらんとおもふ
水涸るる川のほとりに幼き日わが貴びし数珠玉を摘む
川原に数珠玉摘めばほのぼのと草の香たてりかつての如く
谷川のほとりにあそび小春の日に赤く輝る豆柿を採る
経と緯の一隅にして獅子座より流星の降る時を待ちをり
はからひのなき出逢にて山椒の挿木かるく自然誓を播る
佐太郎を学ぶえにしに再会のありて紅葉の両子寺を訪ふ
豆柿を人に見しめて自らもかつて遊びし谷地を恋ほしむ
陰平といひしふるさとの道寂し涸川に沿ふ人けなき道
梅園が一即二論を譬へたる釣瓶いまなく古井戸のこる
梅園の私塾跡にて山畑はをがせに梅の老木枯れをり
黄塵居といふ東より来し人のわが居に歌をのこして帰る

修ちゃん挽歌

どうして早く逝ったのだろう

何を嘆いて決めたのだろう

いまは語れる物語

二度とこの世に生まれて来ないと

言った言葉が若すぎるよ

やせつぼちで瞳の澄んだ

全くやさしいヤツだった

いまでは遠い物語

英語がぺらぺらなくせに

カルメン観たいと言つてたね

何で誰にも言わなかったのだろう

命絶つまで悩んでたことを

いま蘇る物語

君が存在していたことを

僕が唱いつづけてやるよ

台北

一時間繰り上りたる台北の冬空はれて風のたゆたふ
冬日てる午後あたたかく忠烈祠を衝る兵士の直立つづく
蒋介石の訓を掲げし紀念堂「以民為主」の言葉身にしむ
士林官邸の苑しづかにて丈低きこすもすの花冬ばれに咲く
棕櫚などのたくひの木の葉青々と士林の冬はいまだに長けず
藪なかに里芋生ふるとぞみれば堅き幹もつ里芋ぞこれ
聖人の滝なほ涸れずくれなゐの花咲く崖に水たぎち落つ
陽明山のふところをり谷川の滑石を越ゆる水の音する
南国の苑ゆゑ陽明山麓の薄やうやく冬ばれに咲く
おもむるに山気冷えつつ夕つ日は陽明山のかたはらにあり
曲りつつ上る山みち亜熱帯ゆゑか矮小の山茶花の咲く
夕霧のさむく充ちゆく陽明の山腹さびし薄群ら立つ
霧さむきニウナイ湖山すすき野を分かつ峡谷の吊橋わたる
士林官邸跡の公園とりどりに花の咲きをり台北の冬
大耳朶の文字に示すは陽明山の中腹パラボラアンテナの立つ

二十余年添ひ来し妻と大過なかりしこと喜びて台北めぐる
台北の郊外にして小屋がけの出店のしたしびんらうを売る
長春路あたり行ければ夥しく根を垂れし大榕樹の並木のつづく
いづこにも中国語にて話すこゑ聞こえて親し台北こは
疎ましき勤忘れていまわれは異言語のなか心くつろぐ

深闇

暗いくらい地の果てから
俺たちを呼ぶ声がきこえる
邪悪な神が生け贄を仕留めに
かかったらしいんだ
Deep darkness あまりに幸せすぎたから
Deep darkness あまりに物を崇めたから
みんなの臍に食らいついたらしい

[refrain]

Darkness oh darkness,

it's just the time of your conquering.

Oh the voice of Hell,

it's just what ourselves has made for long beyond.

ほつら切れ目無いビル群の果て

太陽が沈んでしまったそのしじま

低くひくくその声がするよ

どつやら真正な神は死んだらしい

Deep darkness あまりに手を広げすぎたから

Deep darkness あまりに無力をさらしたから

自ら消滅したらしい

[refrain]

禁断の場所

来る処へ来たようだ

久しく誰も見たことも

なしたことも

そして来ようともしなかった処

いまそこに僕は立つ

誰も見たく

なしたく

来たいけれど

そつと触れずにおく処

いまそこに僕は居る

高低の中間に傾いていく日常に

必要なく、否、触れてはいけない処

日常に懐疑をもたらすから

あまたの人々の足下を揺るがすから

来てはいけない場所だったのだ

眞の価値を觀ようとすれば

日常の掟を破らなければならぬ

大衆の攻撃を受けとめねばならぬ

一人の生贄としての僕はいま

深淵が全てを呑み込もうとする

禁断の場所に立つた

これまであまりにも人は

妥協しすぎて来なかつただろうか

あまりにも人は

貴い価値に遠く歩まなかつただろうか

あまりにも人は

平然と他を踏み潰さなかつただろうか

これから僕は

あるいは辿り着けないかもしれないが

その眞実を觀に行こうとしている

深淵をくぐろうとしている
しかし嗚呼、何と心細いのか、独りの旅は

樟の木

わたしは久しく大河のほとりの樟の木であった。
穏やかにみえて何と凄まじいのかその流れは。

さざ波とさざ波が渦をなし、そして碎けてさざ波となり、
あるときは、めまぐるしい天変地異のさまを呈し、
大木に添う木の葉が、あたかもあしらいざまに、
たまたま出遇つた新しい大木に添いゆき、流れる。
自由自在に流れるその木の葉の何と羨ましかったことか。

わたしがここに、枝葉を広げてきたのは、
雨に降られ、河を渡れるまで宿ろうとする旅人たちに、
一夜の雨しのぎにでもなり、その独り言を
聴きたかつただけのことである。

たったそれだけの願いだったのである。

いまはまさに、濁流逆巻いている。

愛する旅人たちよ、ゆめゆめ油断するなかれ。

わたしはこの河のほとりを、幼木に与えようとしている。

濁流の暴れているいま、ここに朽ちようとしている。

どうか、幼木たちよ、

河がむかしのように穏やかに流れるよう、見守っていてほしい。

樟の木はずっと、勇気と、力と、夢と、愛と、慈悲とを

旅人に捧げるといふ誇りがあつたのだ。

わたしは、久しく大河のほとりの樟の木であった。

そして、その河の流れをつぶさにみてきた。

川のほとりに

陽がぼかぼかとなったなら

川のほとりへ出かけよう
せせらぎの音銜いなく
心癒してくれるだろう
理解分別ことわりなんて
ときには棄ててみたいんだ

春のそよ風吹いたなら
川のほとりへ出かけよう
青い小花のイヌノフグリが
囁きかけてくれるだろう
人に見捨てたやさしい花に
ときに気づいてみたいんだ

嗚呼せせらぎは野の花は
求めあぐねる喜びを
こんな身近にひそやかに
ひとり守っているんだよ

踏荊

ひとときの心に似たる焼野かな
春宵の時を吸ひ尽くしたる闇

芹摘んでゐてこみあぐる懺悔かな
悔恨はなし黄砂ふる空の下

荊また踏みゆくわれの四月かな
おぼおぼと霞む道あり歩みいづ
音のなく身にしむ春の愁ひかな

目刈時暫く貝とならむかな
もて余す心の揺れに春の風

病み臥す父にも吹けや花菜風

菜の花の光しづけし嗚呼故郷

仏訪ふ蝶の飛びゆく方へかな

吹き払ふものなき故郷春はやち
春愁や彼此のあひなる淵ふかく

ほそほと道菜の花へ隠るひぬ
芹食うてわが来し方を悼みけり
消沈にゐしを春雷とどろけり
貧しさは安らかさとも茅花つむ
ぎしぎしやパンドラの箱もう開かず
春昼の石となりたるいしほとけ

一切を捨てし軽さに春の風
クレソンの咲けり故郷に籍はなし
われ呼ぶは彼の日の母か春無辺
一片の落花いのちを惜しみけり
山帰来咲くやほとほと流浪人
ふるさとに帰れば泪ねぎの花
あしびきの満山春のみち独り
心底に故郷よしづめ忘れ雪
ただにただにたふとき春野佛かな
命とふ永久へのながれ花筏

嗟ひこゑ背に去る吾に花吹雪
花衣人のぬくみの抜けやらぬ
聯風や菜の花の香を損なはず
春ふかし遠ざけて読む正信偈
なみだはや乾きし眼山笑ふ
涅槃西風疑団を解しくれにけり
辛夷さくみち深閑と黄泉の夢
くにさきの悉皆仏の山火燃ゆ
音のなき賛嘆にして土筆群
春無辺つみぶかうして影法師

春宵の挫折とほくに灯のひとつ
孤高なる吾さながらに春の雲
たとふれば偏屈原の朝寝かな
花は葉にまた純情をくりかへす
春昼の山気のよどむ中にかへす
五十年ながし短し蝌蚪の紐

駆けてゆく人らを追はず犬ふぐり
竹落葉はらりはらりと時刻む
我執いまなし春昼の崖つぶち
ながかりし自問の果てや黄砂ふる

第四部

郷里両子に遊ぶ

菜の花の光しづけし嗚呼故郷
知る人のおほかたは亡し春山河
わが憂ひ吹き散らさぬか春はやち
とぼとぼと旅行けよかし如月尽
一条の道菜の花へ消え薄れ
芹食うてわが来し方を悼みけり
バス停といふ箱小屋も花散らふ
貧しさに育まれしか茅花つむ
ぎしぎしや仄かに酸ゆき過去もあり
春昼の石をよそほふいしほとけ

雲

大空を流れるひとひらの雲から
何年も何年も誘われてきた

「なぜきみは、そんな暗い道ばかり歩いて、空を飛ぼうとしな
いんだい。」

「飛べよ、飛んで来いよ。」と
そしていま、ぼくは

空の雲にやっとなれた

みんな幼い頃そうだったように

大空を翔けるがよい

自由と闊達を取り戻すがよい

きつと再た

多くの友たちが迎えてくれるに

違いないから

そして今度こそ

みんなで手を取り合って

あの宇宙の果てまでも

自由に飛んでゆくがよい

U課長への礼状

拝啓

秋もいよいよ深まってまいりましたが、いかがお過ごしでしょうか。

私は、この頃ようやく新天地（市内 豊苑）にもなじみはじめ、毎日忙しい日々を送っております。退職の際にはお心遣いまで頂戴し、感謝致しております。申し遅れましたが、改めてお礼申し上げます。

このたびの一連の私事を振り返るにつけ、人生は思わぬところに大きな転機が潜んでいるのだなあと考えさせられます。

種々のことが重なりあつて、一気に新しい方向へ引き込まれてゆく、そんな感じですが、いま、福祉の仕事にいわば漂着し、奮闘、充実しておりますが、これもそうした運命のなせるワザなのかなと痛感いたしている次第です。

ここに、こうして立っていられるのも、団体職員時代を通してU課長はじめ諸先輩の方々の御陰だと感謝しています。

別府のお宅にちよくちよくおじゃまし、ごちそうになったことや、木船城の見える前のお宅に

おうかがいし、山芋を掘りとり汁にして食べ美味しかったこと、食事の前の勢いのよい温泉が
気持ちよかったことなどが、まるで走馬燈のごとく脳裏に浮かびます。

あれから、もう二十年以上過ぎたなど、信じられないような思いです。本当にお世話になりま
した。ありがとうございました。

課長もこれから、ますます多忙を極めるとは存じますが、どうかお体は大切になさってください
い。また、近くにお越しの節は是非とも 豊 苑にお立ち寄りください。苑内をご案内させて
いただきますので。

課長の今後一層のご健勝とご活躍をお祈りしつつお礼の言葉といたします。 敬具

平成十四年十月五日 (筆者) 拝

U 課長 様

夜の雨

夜の雨音は心を静かにしてくれるので、好きです。では、これを素材にして、音の聞こえる以
外の（既に地にある）雨のことへと思いを及ぼした歌を作ってみます。

夜に降るさみだれの音おとの無き雨こそ庭の草育まん

SARS 日本に上陸か！

台北でSARSの患者を診ていた医師が四国など日本国内の数力所を旅行し、帰国したという。日本上陸の発端にならないか心配だ。

ともかく、過度に神経質にならず、症状で疑わしいと思われたら、近くの指定感染症床をもつ医療機関に診察してもらうのが、妥当だろう。

子供の頃、結核患者の出た家の近くを通るときは、わけもわからず息を止めて走りすぎるなどした。いまに思えば、的確な情報がないための、行き過ぎた自衛行動だったのかも。

いまは、メディアも医学も発達している時代なのだから、少なくとも正確な情報提供だけはお願したいものである。

短夜のころころつくニュースかな

黄なる大地

ゆき行けど黄なる大地の続きぬし夢さめしかばさみだれの音

遠々に風の波動はきこえつつ臥床はいまも魂いこふ場所
一本の秋葵の苗語らへば今夜の酒は身にしむるべし

(先輩の昇任を祝ふ)

路のべに咲く金鳳花このはなに秘めし人知の善悪おもふ
十八歳にて職を得しことありき大きインゴツトに世の動きぬし
ものなべて分岐点ありたとふれば自己資本比率一割などのこと
悪税といはれし料理飲食等消費税贅を抑ふる思想懐しき
黄岡県赤壁の地にわれら建てし日中友好の舎いまいかならん
生命の初元の力おもひ知る濾過性病原体になす術のなく
生命の基底構造の異変とも肺炎サーズを怖るるわれは
(人間が遺伝子操作を始めたことなどに因るのではとも)

不況対策(私ならいま何を)

私に不況対策の権限があつたなら、いま建築基準法のケンペイ率の緩和を実施するだろう。

そして、緩和とともに、改築三百万円の費用に対し五十万円の補助をする。それも「交付申請書(詳細な図面添付)」、「交付決定」、「概算交付請求書」、「概算交付」、「事業着手届け」、「事業

完了届け、「実績報告」、「額の確定申請」、「額の確定通知」、「会計検査院の検査」などの一連の手続きを大幅に省略したものとす。

この発想は、三百万円くらいの改築費用なら民間活力も大いに見込まれ、要は、国民の血税をあまり使わなくてすむとの理由による。

後段の、手続き簡略化は、公務員の無駄な事務介入を極力排するためである。見ておわかりのとおり、大仰な手続き自体が公務員の（言葉がよくないが）メシの種になっているからである。

もともと消費税導入と、マスコミの煽り立てで招いたこの不況に対し、行政がああだこうだと付け焼き刃の対策を打っているのだが、こころでほんとに国民のために（直接に）なる対策を講じてほしい。

国民は、まだまだこれしきの貯金ならあるのだから。

梅雨近し消費マインド冷えのまま

初夏の雰囲気

初夏の雰囲気になってきましたが、みなさんお元気ですか。先日田舎（国東半島の両子）に帰りましたら、道端には薊の花や、スカンボの長けた臺（花穂）が咲きあふれ、また金鳳花の黄色い毒草も咲いていました。

古里は、いつ帰っても静かです。いつも、両子山が変わらずに迎えてくれます。

数年前まで、独居世帯が数軒云々と思っていました。最近では廃屋も増えつつあります。

それでも、なお田舎の生活を守っている人たちは、椎茸の駒を打ったり、田植えの準備をしているようでした。

自分を育ててくれた古里、いつまでも大事にしたいと思いました。

野薊や胸がきゆうんと過去おもふ

エタノール

SARS 予防のための手指などの消毒には、エタノール（エチルアルコール）や次亜塩素酸ナトリウムなどがいいそうだ。このうち、エタノールは毒性がなく、一般の薬局でも売ってくれているので、家庭用として良いとのこと。

エタノールは、注射をする時に綿で肌を消毒するときに使われる液だが、SARS の成分であるタンパク質を凝固させ、活動を止める効果があるそう。家庭に備えておけば役立つとのことなので、情報としてここに記した。

使用法は、あまり詳しくないのだが、注射のときのように綿に含ませて汚染の可能性のある物の表面を拭けばよいのだと思う。

それにしても、わが国には果たして S A R S が発生することはないのだろうか。心配でならない。

ウイルスの懸念はいまも梅雨近し

力愛不二について

太極拳の方もお見えのようなので、昔私の励んでいた少林寺拳法のお話をひとつ。

少林寺拳法は、宗教法人金剛禅といって、素朴な原始仏教を信奉する宗教でもあります。

その教えの中に、標記の「力愛不二」があります。これがなかなか的を得ていて、私の好きな言葉でした。

意味は、例えば目の前で溺れている人を見て、「かわいそうだなあ」という愛だけがあってもだめだ、その人を救う力がなければならぬ、そのようなものです。

ですから、この言葉からはいろいろなことが見えてきます。理念のみを唱えても実行が伴わないとだめだ、とか、各医療法人や社会福祉法人、株式会社でも構いませんが、一定の安定的収益がなければ、良い医療、良い福祉、良い物やサービスを提供できない、つまりはそれぞれ力が必要なのだ、等々。

若い頃、この少林寺拳法はとかく消極的だった私を、積極志向へと転換させてくれましたので、

標記の言葉とともにいまも感謝しているところです。

命かな樟の若葉のみづみづと

自費出版について

よく言われることに、「I S Bコードの付いているものは正式な書籍、それ以外はただの印刷物」というのがある。同じ音楽CDでも、レコード会社から出したものが正式なCDで、その他はCDRだと言われるのと同様である。

しかし、この「正式」というのは何だろうか。本の内容に区別はないし、CDについても歌の善し悪しがあるのみである。

世の風潮は、どうしても権威に頼らざるを得ないような仕組みになっているようである。

そんな、権威主義に地方から少しでも異議を唱えたいものである。内容の良いものは、「日本協会」(ほとんどが東京に事務局を置いている)が認めなくても、「良いもの」なのであるから。

よく、田舎新聞が「誰々さんが何々という本を自費出版しました」などという変な紹介をするが、「自費」などといういわば「財源内訳」まで言及する必要はないと思うのだが。

これからは、何につけても新しい発想の時代だ。古い固定観念に拘っていると、誰かの言う「日

本の常識は世界の非常識」からいつまでも抜け出せないのではないかと思う。

みなさん、出版社以外で出版した本で自信作があれば、このホームページを活用して大いに宣伝してください。「良いものを良いと言える時代」を切り開いていきましょう。

梅雨人かな権威とふ摩訶不思議物

「さようなら」を交わす別れ

幼い頃だが、親戚の家に行つて帰る時になると、見送られて名残惜しみつつ別れたことが妙に懐かしい。

お互いに手を振りながら「さようなら」と言いつつ別れたのである。

ほんの三十キロくらいしか離れていなくても、交通事情のせいで遠い、との感覚だった。だから、心から別れを惜しんだのである。

いまだでは、いつでも逢えるのだから、との感覚が先立ち、別れの挨拶がなごりにされてきているのだと思う。

時間、距離、これは科学的なもののためだけにあるのではない。人の心をも大きく変える要素だと思つた。

現代がなくなってしまう大切なもの、それが戻る日はあるのだろうか。

けふもまた車行き交ふ薄暑かな

短歌の面白さについて

短歌の面白さは、いろいろあります。ふだん目にとめない物に関心をもてるようになるのもその一つです。

何の変哲もない風景のなかに、価値ある詩がひそんでおり、それを捕まえようとすることからです。短歌の価値は、写真のように単に風景を自分で切り取って三十一音の文字になすだけでも可能ですが、大半は自分の人生観の含まれたものとなるでしょう。つまり、作歌が進みますと、次第にその歌に自分の「生き方」が含まれるようになり、さらにはその作品が自己を代弁できるまでになります。

面白さをもう一つ挙げましょう。

作歌のためには、語彙を豊富にしておく必要があります。雑草や木の名、花や虫、鳥に至るまで、これでよいということはありません。さらに、作歌力がつくに連れ、古語や漢詩、西欧の詩から更には種々の芸術論、宗教論、そして究極は哲学論などへとその雑字領域を広げていきます。だからといって、雑字を無理に急ぐ必要はありません。それが徐々に広がっていくこと、そのこと自体が作歌の楽しみなのですから。さあみなさん、題材は何でもよいので、一緒に作歌して

みませんか。

詩が潜むとふ梅雨空の下に住む

昔生活ありき

ある介護関連雑誌に「昔は施設には生活があった」との記述を目にした。その瞬間、「これだ！」と思った。

生活、それは誰もが失いたくないものだからだ。

介護老人保健施設には、果たして生活があるのか……。 「Aさん、次はお風呂に入りましょうね」、それが生活と言えるのか。

ぼくらを悩ませるこの言葉、「生活」。

この、直感的にキーワードと思える言葉を忘れず、ぼくらは介護の本来のあり方を探求していかなければならない。

梅雨くらき心の中に灯が一つ

たかが体操？

どんな職場でもそうだが、いわゆる雑用と呼ぶものがある。

お茶くみ、室内清掃、書類のコピー、書類配布等々……。

私は、かねてより、それらこそが最も大切な仕事だと思ってきた。だから、昨今「女性にお茶くみをさせてはいけない」などと規律を作るのは、逆に、それらの仕事を軽視する気持ちが前提にあるのだとさえ思っている。

なぜ、お茶くみが大切かと思っているかという点、種々の仕事には本来差別はないのだと思うのと、人が軽視しがちないわゆる雑用に真剣に取り組む人は、どんな仕事にも真摯に取り組むので、結果として仕事のよくなる人だと判断される、ということ、さらにその人の人性の高さまでも表しているとさえ思えるからである。

ところで、私の職場では、毎朝入苑者と職員が一緒に体操をする。

「たかが体操？」

いや、そうではないだろう。体操から明るい一日が始まる。のである。

一所懸命に体操していると、それまで車椅子でうたた寝気味だった方が、少しずつでも手足を動かし始める。

その時、やはり体操も大切な仕事なんだ、と思うのである。

青天へ咲きのぼらんと立葵

守旧派の論理横行

鳥取県知事が、地方への税源移譲の先送りを決めた地方分権改革推進会議を批判し、同会議の議長を務める東芝の会長を批判する立場から東芝製品の不買発言をしたところ、そのことを批判するメールが数多く県庁に届いたそうだ。

何かしら、本末転倒した知識人が多いようである。

鳥取県知事の心情が理解できない者は、地方分権など到底理解できない人たちだろう。「百円の仕事をするのに三十円に満たないお金を渡し、頭を下げて来れば残りの七十円をしぶしぶ支払う」これが現行の制度、この制度を鳥取県知事は正常に戻そうと考えてのことなのである。

東芝会長のまとめたのは、官僚接近型つまり守旧派の論理にほかならない。守旧派の志向はいつも庶民の立場に乖離し、例えば「消費税を二十パーセント台にする」などの発想を持ち出すのである。直間比率を徹底して是正するなら、そんな論理もなくはないだろうが、いまの不況下、さらに「物を買うな」とでも言うつもりであろうか。

いま、真に国民の立場に立った改革推進論者の出現を望むものである。推進会議の議長に大企業の前会長は要らない。

梅雨深し人の心に雨が降る

財源移譲の高慢理論

地方への財源移譲問題をめぐってよく耳にする言葉に「いまの段階で地方に移譲して、大丈夫ですかねえ」、「三千三百もある自治体のうちにはねえ……」。

こんなやりとりを聞くと、可笑しいというか、情けない気がする。話している当人が、日本の経済を破綻へ導いた張本人たる政治家や官僚上がりの気取り屋、あるいは世間知らずの大学教授 K であつたりするからだ。

世界の感覚からすれば、何十年前にも前に解決して、当たり前の案件を、いまごろこんなやりとりをするような国は、到底理解できないのではないかと思う。

国の役人が、偉大なる偏差値をもつてしたとしても、地方の疲弊の現状や、自分たちのこととして涙ぐましい努力をしている地方人のいることなど、理解できるはずもないだろう。

それも、不備な制度の中で苦勞しているのである。

小泉首相は、税財源の移譲について思い切った指示をしたようである。厳しい抵抗勢力の蔓延状態の中でなされた、この勇氣ある決断を素直に讃えたいと思う。

吹き降りの雨紫陽花を輝かす

今日をもつて新天地まる一年

今日をもって、新しい職に就いてまる一年ということになります。感無量です。新しい出会いは感動的でさえありました。

これまでの人生を顧みますと、いわば「綱渡り」の連続でありました。

高校から福山の製鉄所に就職、そして自然のなりゆきのまま大学進学、それも経済学部でありながら アジアの時代到来に備え 中国語修得を第一の目的としておりました。全くもってミス マッチの連続であります。若さの故に機の熟すのに任せていた気がします。

大学四年の頃は、どこに就職する、といった明確な当てはありませんでしたが、友人が公務員を目指すというので、それに便乗しました。要は、遊ぶお金がなかったので、下宿で暇を潰すのにちょうどよかったです。

それが、偶然にも、県の上級と防衛庁の九州幕僚監部試験に受かり、県の方を選択しました。

県で初めて、社会人としての真の生き方を勉強できたと思います。ある素晴らしい上司との出会いがあり、その上司に学ぶ素晴らしい同僚たちにも出会え触発されたからです。

人生は、一つの生き方に固執するのを必ずしもよしとしない、という若い頃からの漠然とした考え方が、昨年の転職へとつながった気がします。県の時に医療行政に没頭したことが、いまの介護現場への就職という運命へとつながった気がします。

そして、まる一年はあつという間でした。新しい職場において、同僚がみな仕事に没頭していることが、私に勇気を与えてくれました。純粹に仕事に頑張っている職員の姿に感動したのであ

ります。

こんなわけで、民から公、公から民へと回り道をしてきた自分ですが、いまはよい仲間たちは『战友』と呼んでいます。に囲まれ、地域における福祉の充実に少しでも貢献できればと奮闘しているところであります。

この場をお借りし、みな様に心より感謝申し上げます、これからの更なる努力をお誓いいたします。

いよいよ七月

いよいよ七月、蝉の鳴く日も近いでしょう。田舎に帰ってウナギ釣りでもしたいものです。

ウナギは、チヨン掛けといって細い竹の棒の先に細長い針を着けたもので穴に差し入れて釣ります。えさは、ミミズです。

子供の頃は、年に五、六本釣りました。昔大阪でヤクザをやっていたというタトゥーのおじさんが近くに住んでいて、よく可愛がってくれ、その釣り方を伝授してくれました。

そのおじさんは、ウナギ釣りの名人だったのです。

昔は、いろんな意味で社会がおおらかでした。いまは、予想もしない事件が予想もしない場所で起こったりして、変な世の中になったものだと思います。

それでもめげずに、みなさんおおらかに頑張りましょうね。

蝉鳴くを五十男の吾も待つ

「ウソ」が日本をダメにした

最近立て続けに、奇妙で悪質な事件が起こっている。一家四人を襲撃し、子供2人を含め全員殺害し手錠をかけて海に沈める、数人で一人を暴行して殺害しコンクリート詰めにして海に沈める、見知らぬ女性の後をつけ家に押し入り平気で殺め現金を奪う、幼児を誘拐し衣服を脱がせピルから投げ落として殺害、平気で無関係の幼児にガソリンを浴びせ火を着け大やけどを負わせる、等々。

一体、この国に何が浸透しつつあるのだろうか。戦後の米欧型社会制度への転換がいま限界に達したのか、それとも国際化により国民の考え方が悪い意味において米欧に近づいたのか。あるいは、

経済重視の政策が破綻し国民自体が倫理喪失の状態に陥ったのか……。

全く理解できない。

ともかく、私たちは批評はさておき（マスメディアはただ事実を報じるのみで社会浄化の機能を喪失してしまっている）、倫理回復、というよりもむしろ、昔わが国にあった義理と人情を回復すべく取り組まねばならないだろう。まず、世の中のほとんどすべての分野（政治 政党

助成金をもらつたうえに献金も受ける、行政 不必要な公益法人を作り天下り先を確保する、銀行 強い者には貸し弱い者には貸さない、不良債権は育成したサラ金会社に丸投げ などと言つてもなく、会社全般の営業 安くできるのに高い見積もりを出す や、農業・商業流通分野 安い外国産の産物を国産として売る・誇大広告をして高いマージンを付けて売る)で蔓延している「ウソ」を徹底して排除すべく立ち上がる必要があるだろう。

私は、ずいぶん前から、今の時代は幕末の混沌状態よりももつと悪い状況にあるとみており、これを改革するにはよほどの覚悟がないとできないだろうと思つてゐる。

さあ、みなさん身近なところから「ウソ」を撲滅する運動にとりかかろうではありませんか。そして、昔あつたほのぼのとした日本人の人情を取り戻しましょう。

人情はいづこ梅雨などこじ開けん

改革進まず

能力主義や天下り見直しを内容とした国家公務員法及び地方公務員法改正法案が、今国会提出を見送られたそうだ。

残念なのは、その理由である。与党つまり自民党及び公明党などの了承が得られないからとのこと。

言い換えれば、自民党などに属する国会議員（その中のいわゆる抵抗勢力ということになるが）は、年功序列や天下りに賛成していることになる。

国会議員の考えが、ここまで多くの国民の考えと乖離すれば、政治や政党に対する信頼の喪失にますます拍車がかかることとなるだろう。

もう、政治に期待するものは見つからない。我々庶民は、身近なところで自分にできる改革を少しづつでも着手していくほかはないだろう。

憤りを通り越して、空しさを感じる出来事である。

もたもたと明ける明けんの戻り梅雨

経常収支比率

多くの人には耳慣れない言葉だが、これには重要な意味がある。全国の多くの自治体はこれが高かた高い比率を示しているのである。

このことは、何を意味するのか？ それは、収入に対し経常経費、主に人件費の占める割合が高く、地方活性化等のための新規事業を行う予算はごく少ないということである。

これでは、全国の自治体は、現状のままていくら頑張っても、効果的な施策を打ち出せず、いわば死に体と言われても仕方がないだろう。

いま自治体には、現状否定の時期が来ていると思う。要は、民間企業と同じように自ら血を流しリストラをやる覚悟がなければ、地方の、そして日本の明日はないということである。

地方の議員はといえば、こうした現状を少しも取り上げることがなく、同じぬるま湯に預かっている。中央のミニ版で気取ってる地方議員（長野県の某議員の態度を見たらよくわかると思うが）に期待できることは何も無いと思う。

この現状を打開するのは、民衆の力しかない。

ここにも抵抗族の屯かな

在日韓国人のママさん

ママの店へ行き始めてから、もうかれこれ十年余になる。一緒にハングルを勉強していた仲間が連れて行ってくれたのだが、その仲間たちはあまり店に顔を出さなくなつて、いま僕だけが相変わらずその店に通っている。

店では、多くの韓国人の人たちに出会つたし、僕の方からは仕事で知り合つたアフリカのある小国の臨時代理大使をそこに連れて行き、二人で飲み明かしたこともある。

いろいろな出来事が、まるで走馬燈のように過ぎていった。

ママさんは、私のハングルの師であり、親友であり、韓国民謡の「恨五百年（ハン・オベグニ

ヨン」の師でもある。

いまだ、韓国に渡っていない私だが、必ずいつか行こう。そして、田舎を旅しながら、両国の長い歴史を感じ歌に詠み、そして韓国のお年寄りに私の声でハン・オベグニョンを聴かせよう。これから、未永く両国が仲良くお付き合いできるのだという証として……。

夏なんぞに負けてたまるかキムチ食ふ

七月も残り僅か

早いもので、あと四日で八月ですね。仕事の方では、いま、地域ケアキュア・ネットワークへの取組と、職員研修に力を入れています。

ケアキュア・ネットワークは、行政プランでは長い間目標に掲げられていますが、現実には明確なノウハウが示されているわけではないので、いわば手探りです。

まず、地域の皆さん方との関係構築とニーズの把握が重要との視点から、自治会や老人会などに出させて貰い、介護保険制度や地域連携が必要な理由などを中心にお話をしたりしています。

先日は、介護教室ということで、尿失禁の防止を取り上げ、またその防止効果があるリハビリ体操を実演しました。

各専門職員から寸劇風に説明しましたところ、大好評でした。そうした取組が少ないからか、

制服でしゃべる職員の姿に地域の人が高齢者問題を自分のこととして実感したのかもしれない。

いずれにしても、まだ始まったばかり、地道に取り組んでいこうと思っています。

若き行政マンの勘違い

行政団体の機能について、福祉の面から考えてみたい。主なものの一つに挙げられるのが福祉推進機能、そして他の一つが福祉団体等に対する監督機能である。

これらの目的は、言うまでもなく国民が福祉サービスをうまく享受できるよう環境や条件の整備をすることにある。

ここで忘れてならないのは、例えば介護福祉を例にとるならば、福祉サービスを直接に提供しているのは行政ではなく、特別養護老人ホームであり、介護老人保健施設であり、またヘルパーステーション等々であるということである。つまり行政はこれらの施設等がスムーズにサービスを提供できるよう支援することであり、その意味で福祉においては官民は協力関係にあると言えるだろう。さらに言えば仲間である。

しかしながら、現実はなかなかさうはいかない。標題に取り上げた若い行政マンは、若さからかあるいは不勉強のためからか、どうも性悪説に近い考えで施設が不適切なサービスを行わない

よう 取り締まっている と自己の立場を勘違いしているようなのである。

経済政策をはじめ、農政や土木建設、厚生、教育等々、官公庁の機能が、ほとんどマヒ状態におかれている昨今、多くの職員たちは民間の力を再認識し、国の再生をその力に頼むような方向へとシフトしてきているのであるが、残念ながら地方団体等にはまだまだ標題のような古い迷信を脱却できない者たちがいる。

二十一世紀は、新しい発想の時代でありたい、それが私たちの切実な願いである。

行動する最初の時から、その依って立つスタンスを誤っている標題のような行政マンは、新しい時代には不要である。誤っているときは素直に認め是正する、勇気ある行政マンはいま育ちつつあるのだろうか、そのことが気がかりに思われてならない。

炎帝に用なき五十男かな

私の感謝しているアーティストたち

先ほど、テレビ番組でピージーズを見て、ふと思ったこと。それは今の自分を形作ってくれたのは、ほとんどがかつての西欧音楽家たちだった、ということである。

十六歳のころだったが、夢を世界へと向けてくれたし、イメージーションの大切さを教えてくれた。

作曲という、自分を表現するのに最も効果的で、満足感のあるものへと導いてくれた。いま、思い起こしてみても、感謝の気持ちがいってくる。

クリフリチャード、ビートルズ、ビージョーズ、サイモンとガーファンクル、ビーチボーイズ、ジョンデンバー、エルトンジョン等々、数え切れないほどの巨匠たち。

彼らと同じ時代を生きたことが、ほんとに幸せだったんだなと思う。

これからも僕は、ささやかでも拙くても、曲を作っていこうと思う。

老つけど夢なほもあり夜の秋

いろは歌

(い以)

いつしかに夏行きしかば移ろひをわが嘆かひ

て夜を更かしむ

(ろ四)

路傍はやあら草に穂の立ちにけり時の流はず

べてを統ぶる

(は波)

働くは人のためとふことはりを説く人もなし
世の乱れしか

(に仁)

担ふべき未来おもけれどひたぶるに介護現場
に己を捧ぐ

(ほ保)

星ふるといふ日も雨と過ぎゆきて寂しき夜を
けふも重ぬる

(へ部)

へこみたる心にてあれば気を入れるごとくに
拳握れよをのこ

(と止)

問ふべきはまづは己の存在の意味としながく
迷ひぬたりき

(ち知)

ちりぢりに旧き友らの去りゆきてきづきし身
は理想に燃えず

(り利)

流暢なる弁よしとする風潮はテレビメディア
の理念を腐す

(ぬ奴)

ぬめぬめとせる納豆を朝ごとに食ひて一日の
力やしなふ

(る留)

瑠璃色のつゆ草咲けるふるさとの道を歩めば
父ぞしのばゆ

(を遠)

をりふしに思ひいづるは幼き日川原にをりて
ききし水音

(わ和)

若き日はたちまち過ぎて愚かにも食卓の稜に
腕打ち当つる

(か加)

かなかなの鳴けば寂しも明らかに時代に遅れ

たる者のこゑ

(よ与)

よすがらに夢みて眠れをとめごよ汝の未来は
わが生きの糧

(た太)

たたなづく両子の嶺はみどりして雲流れゆく
空にそびゆる

(れ礼)

連結の音次々にうちひびき夜行列車のうごき
始むる

(そ曾)

算盤の練習にして百六十五をいくたびも足し
し日々し思ほゆ

(つ川)

つばくろのひるがへり飛ぶ故里の空の明るさ
山のしづけさ

(ね祢)

合歡の花おぼおぼと咲く村のみち嘗て裸足に
て遊びたる道

(な奈)

何気なくいひし言葉を恨みたる人ありしとぞ
人は悲しも

(ら良)

落胆をせし去年のこと過ぎし日はなべて美し
き記憶に変はる

(む武)

無為といふこといつしかにわが内に幸ひを生
む家ごもりつつ

(う宇)

うすむらさきの朝顔ひらく苑の庭にわが親し
みて一年が経つ

(ぬ為)

みなかうどを超え得ぬ吾はささやかに胡瓜搽
みにて酒を楽しむ

(の乃)

野蒜さくかたはらに水いきほひてその音きけ
ば心やすらふ

(お於)

老人はみな健かに暮らすべし慈しみくれし祖
母いまは亡し

(く久)

くにさきの寺々に置く焼佛ふるき戦をいまに
伝ふる

(や也)

山ふかきわが故里や七島蘭を培ふ人をいまは
見かけず

(ま末)

ま青なる海としなりてこの秋は深まるらしも
寂しけれども

(け計)

検束のなき夜の時をゆかshめて臥床にひとり

未来をおもふ

(ふ不)

不可思議なことにて物と心あり物はこころの
中にもありや

(こ己)

越え来たる修羅の数々おほかたは吾の欲りた
る故と気づきぬ

(え衣)

えごの花をちこちに散る山の道かかる処に寺
は栄えつ

(て天)

手にとりし龍の玉いくつ青々と初冬の朝の光
を反す

(あ安)

あさまだき窓の外より目覚めたるばかりの雀
かすかに声す

(さ左)

さしあたり欲る物のなく日々が過ぐ少欲知足
の教へしたしも

(き畿)

黄にあふれ菜の花の咲く川端にわれ生れしが
その家知らず

(ゆ由)

夕暮るる川の水面に跳ねたりし鯉の命の音ぞ
かなしき

(め女)

めくるめく世の移るひに疎くゐていつか故郷
に住まんとぞする

(み美)

見つめたる眸と眸わが妻を愛しし頃は妻若か
りき

(し之)

しづかなる昼過にして道のべの鳳仙花また実
の弾けたり

(象恵)

糸ひ醒めの重き眼に明けてゆく海の渚に寄る
波がみゆ

(ひ比)

ひすがらに福祉の理論おもひしが無意識にも
つエゴイズム知る

(も毛)

悶々とせし日々過ぎて老人とともに生きつつ
心救はる

(せ世)

せせらぎの音はいまだもわが内にありてをり
ふし故里を恋ふ

(す寸)

過ぎし日や立つ虹のごとつつし世に生くるわ
れらを浄からしめよ

私が、転職により偶然にお遇いし尊敬してきた新貝哲一先生が十八日十七時半頃お亡くなりになりました。

当時、転職ということで挫折の心情にあった私を、立ち直らせ支えてくれた方だといまでも思っています。ほんの一年余のお付き合いでしたが、私の一生のなかで最も重要な時間を共有できたのだと確信しています。心より哀悼の意を表しご冥福をお祈りいたします。

曼珠沙華

ことしも秋彼岸になり、苑の隣の庭に曼珠沙華が咲いた。ある人が「花は偉いな」と言った。私もそう思う。

日本がまだ中国大陸と陸続きで、人々が照葉樹林の森で実を拾って食べたり、一部の人々がようやく焼畑を覚え森に定着しつつあった頃から、この曼珠沙華は人々の身近にあったときく。

人々は、必ず時季をたがえず咲き、そして株が殖えず毎年ほぼ同じ場所に咲くこの花を、畑の境界に植え、土地争いを避けていたに違いない。

また、毒性を取り除けば食用になるということを知っていて、飢饉の年などには飢えをしのいだに違いない。

不思議な雰囲気醸し出しているこの花には、奥深い人の知恵がきつと、関わり合っているの
であろう。

そんな、とりとめのない事を思うなか、つい先日他界された先生も過去へと旅立たれたのだ

なあ、この思いも私の脳裡をよぎった。

妖艶にほとばしる過去曼珠沙華

第五部

医療体系論として一言

いま、国により医療機関に対する人為的な機能分担策がとられている。これは病院病床について急性期か慢性期かのどちらかを選択させるという、いわばアバウトな荒療治の方法によってである。

急性期か慢性期か、そのような二極に収斂されるほど、現在の医療ニーズは単純なものではないし、ましてや国が国立病院の機能分担を企図しながらその理想論が破綻し、病院再編期を経て結果的に独立行政法人への方向性を選択せざるを得なかったことや、多くの自治体病院が赤字補填のために、毎年巨額の一一般財源を拠出してもらっている現状を、私たちは今こそ直視しなければならぬと思う。

国は、急性期加算といういわばあめ玉を突きつけ、病診連携と称して、病院にとって大切なプライマリケアの外来患者を人為的にクリニックに回すことにより、地域の中核的病院を性急に第二次医療型病院として定着させようとしているが、それは机上論の域を出ないものではないか、との疑念を払拭しきれない。

なぜなら、「西欧型医療体系がわが国の医療体系にも妥当するのだ」ということを前提としたようなこれら一連の施策は、どのようにひいき目に見ても、私には理想論に溺れた一つの妄想のように思われてならないからである。

わが国のクリニックは、介護保険制度の導入に伴い、介護療養型長期療養病床を有する施設となり、その意味において既存の病院と対等の立場にある。つまり、クリニックと病院とはいわば競合関係にある施設だ、ということにはほかならず、西欧の例のようにベッドをもたず純粹にプライマリケアに特化されている施設とは全く別物だということである。

国はまた、地域医療支援病院等と一般病院との間に紹介率の算定式で差別化を図っているが、かかる条件のもとにおいて民間病院が紹介率三十パーセントをクリアするのは、至難の業だと思われる。これをクリアしようと思えば、分母となる外来患者数の減少が求められるが、留意すべきは、その外来患者は将来的には分子たる当該病院固有の急性期患者になる可能性を秘めた、いわば当該病院を最も信頼してくれている登録会員のな患者であり、これを机上の算式三十パーセントのために切り捨てることは、一面で、当該病院がその将来的な芽を自ら摘むことにほかならない。

この相矛盾する人為的パラドクスを敢えてクリアすべきか否かは、病院にとって死活問題である、と言っても過言ではないだろう。

急性期病院を志向する病院のとるべき安全な道とは、一体いかなるものか。

私見をばからず述べるとすれば、急性期の第二・三次医療機能を支えるものとして、外来医療機能は不可欠の機能であり、これが紹介率アップの隘路と考えるのならば、外来患者を対象としたプライマリケアセンターを病院に併設させるのが、一つの選択肢だと思う。

別法人格の医療法人を設立してその機能を分担させ（注：急性期機能支援プライマリケアセンター 仮称、訪問看護ステーション併設）、二つの法人が相互補完して急性期機能を支える、このかたちが最も効果的かつ安全な方策であると思う。二にして一、これが現行法のもとでとりうる僅かな選択肢だと思ふ次第である。

昨今は、未曾有の混沌の時代である。何でも国の指導に従っておればよかつた時代は既に終焉を迎えた。急性期病院は、「急性期機能に加えて、それを支え補完する予備機能の二つをもたなければ、その本来的な機能を果たし得ない」と、そのように思われてならない。

【参考】

第三次機能を目指してきた公的病院が、十数年経つても市民病院の体を脱しきれない状況にあるのは、「脱しきれない」のではなく、「外来患者を他に委ねた病院経営はあり得ない」ということを実証しているのだと思う。

国立病院は、ある程度紹介率を達成した状況にあるが、それは不採算部門を担っているという名目での国庫補填があるからであり、独立行政法人になれば、外来機能を重視せざるを得なく

なると推測される。

現在は、従来の理念とは全く逆の、「診療所が長期病床を有し、病院が在院日数の短縮を求められる」時代であり、現行の医療法令体系は国の応急処置的施策により、コペルニクスのな抜本改革を要する岐路に立たされている、と言っても過言ではないであろう。

官僚機構の欠陥露呈

元官僚の居直り劇、これこそがまさに官僚機構の欠陥を露呈したものだと思う。

権力の上に長く坐ると、この居直り爺さんのように公私の区別がなくなるようだ。

居直れば居直るほど、国民の反感を増幅させているということに全く気づいていないようだ。

もしこの問題が、爺さんの主張を認めざるを得ないような結果にでもなれば、その時こそ、天
下り防止法案の論議や、公務員法そのものの全面改正論議へと国民の力を結集しなければなら
ないであろう。

いまは、静観する以外に道はない。

FA制について

私が東京事務所勤務していた平成七年頃、親しくしていたただいた某参議の事務所で、

「公務員も野球選手のようにFA制（フリーエージェント制）を導入すべきだ、一定年限を勤めたら、民間企業或いは他の地の役所に自分で交渉して行けるようにすれば、役人の意識改革ができるし、また民間企業の厳しさを吸収し組織の活性化につながる……」

などと、よく話していたことがある。こんな突拍子もない話に、秘書の方も先生も、

「貴方はほんとに面白い人だね」

と大変受けたのであった。

それが、今朝のヤフーでこんな見出しを見つけ驚いている。私の当時では突拍子もなかった話がいま実現するというのだ。

ヘッドライン

先生もFA宣言できます 京都市教委が来春導入

京都市教委は十一日、一定期間以上勤務した教諭に行きたい学校を選ぶ権利を与える「FA（フリーエージェント）制」を来年度の人事異動から導入する、と発表した。教諭が自分の得意分野や専門性をアピールし、受け入れを希望する学校長と直接話し合う。市教委によると、先生にプロ野球選手並みのFA行使権を認めるのは全国で初めてという。（京都新聞）

いま、世の中はまさに変革、激動の時代であり、虚から実への転換期にある。

行政の側も、現行の行政制度を守ることのみに固執するのではなく、自由な発想をもって、改革に取り組んでもらいたいものである。

特にこうした、民間企業の切迫感とともに共有する制度ができれば、役所が真に住民の立場に触れることとなり、マンネリズムを脱却できるのではないかと思う。

路傍

路傍の草花に

明けてゆく空の瑞々しさに

こころ奪われていた頃

あの頃から

ずいぶん年月も経って

いま……

何となく頑なな思いを

自分の中に感じている

前進しているのだろうか？

それとも

前進に似た後退なのではないか？

また路傍に芽を向けよう

もう犬ふぐりも

咲いているかもしれない

暖かくなったら

露の臺やら土筆やら

摘みに行こう

野に出よう

壮大な取組

数十のクリニックと地域の中核的な急性期病院の連携による本格的な機能分担への壮大な取組が始まった。

高い理念が、具現するの否かのオープン化の実験とも言えよう。

このためには、病院側としては、古くから院を慕って訪ねてくれるプライマリケア該当の患者さま、いわば常連客でも、クリニックの紹介状がない場合には、「大変申し訳ないのですが、私ど

もでは医療機能分担を進め、地域のみなさんにより質の高い医療を提供できるようにする取組を行っており、このため、症状の比較的軽い貴方さまには、クリニックの方へとご案内することになります」といった趣旨の説明をし、理解を求めねばならない。

相手方からすれば、「せっかく来てやったのに、症状が軽いから診てもらえないのか」あるいは「祖父の代からお宅にかかっていたのに、もう診てもらえなくなっただね」、「お高くともるようになってしまったんだね」といった感情論へと陥りかねない。

いずれにしても、この取組は成功させなければならない。理念を理念のままに終わらせるわけにはいかないからだ。

いま、医療界では静かな革命が進行しつつある。これまで理屈ばかり言って救急搬送患者をほとんど受け入れようとしなかった某公的病院が、いつのまにか受入を開始していた。

市町村合併、公団の民営化、国立機関の独立行政法人への動き、年金施設の処分の動き等々、制度改革の大きなうねりのなか、動くのをためらう民間機関は窮地に立つおそれが大である。

民官もつれあいながら、大きな流動は当分続きそうである。

子供たち

壊れた土塀の傍らで

小さい子らが遊んでる
食べる物など何にもないから
日の暮れるまでただ遊ぶ
石を蹴ったり土をこねたり
何にもないからただ遊ぶ

Peace peace peace Oh

When we'll get it

Peace peace peace Oh

Now It's far beyond

爆弾落ちた大きな穴も
滑り下りたりして遊ぶ
父さん母さん死んだから
暗くなったらテントに戻る
人を押したり押されたり
テントの中でもまた遊ぶ

大きくなったらパン食うために
銃を取ろうと夢弾む
兵士の兄は頼もしいから
早く戦争したいと思う
パンもなければお金もないし
そんな夢見てまた遊ぶ

ひもじいことは毎日だけど
神が救うと人が言う
時に近くで人が死ぬけど
神と居るから恐くない
ほんとは怖い気もするけれど
神と居るからそれでいい

Peace peace peace Oh
When we'll get it
Peace peace peace Oh

上田閑照先生

今日、NHK 教育テレビで懐かしい顔が、と思つたら上田先生であつた。西田哲学の最右翼と私の尊敬している先生である。

先生には、石川県の宇ノ気町での夏期哲学講座で二度ほどまみえた。

というより、アンケートに、西田哲学のセミナーであるからには時には上田先生を呼んでくださいと私が書いて提出したところ、翌年から上田先生の講座が実現したのであつた。

おだやかな顔と口調、しかし岩波から出ている著書などでは素晴らしい哲学への情熱が感じ取れる。

また、機会をとらえ、上田哲学をじっくりと楽しみたいものである。

アメリカの医療過誤対策

このことは、日本と違って徹底しているようだ。要は、内部告発制度の徹底だ。

医療過誤は、州の医療監督局（正式名称不詳）が取り仕切り、医師に報告を義務づけていると

のこと。

調査官の大半は、医師の行動に最も精通している者として看護師を充てているとのことである。日本制度では、医療の内容を取り締まる法律がないのは一つの欠陥だろう。いわゆる医療監視は、医療施設法といわれる医療法に基づき行われているが、これが主に施設基準に基づくものであるため、医療内容に言及する権限がないのが弱い。

これらは、今後改善に向けて検討していく必要があるだろう。

日本では、アメリカかのような制度もなく、また一方で損害補償保険制度が発達していることも、逆に医療過誤に対する危機意識の緩慢を招いているのかもしれない。

加えて、個人の過失と法人の過失の割合でいえば、法人の方が責任を認める傾向にあるのも医療過誤への緊張を緩めているのではないか、という気がする。

いずれにしても、いまようやく、こうした制度の改善や情報の開示、医療の倫理面での改善の取組が始まったようであり、今後その傾向が加速されていくことは間違いないと思われる。

イラク戦争

戦場の映像みれば人命をたふどころ欠片だになし
にくしみは憎しみを生み所構はず爆弾落とす映像悲し

食ふ物もなきごとき街銃を撃つ男はあはれ機敏に動く
数百の人ら死にしと報じつつ映像の街黒煙の立つ

幾人も死にたる子らのあるといふ戦争は常弱者に重し

土埃たつファルージャアの街あはれ空明るきにヘリコプター飛ぶ

農村に帰り住まんとせしわれがビルの中で小庵を得つ

子のいでし家の静けさを妻の言ふともに寂しき夕餉をしつつ

ほのぼのと八重の桜の咲けるみち二十余年の歲月速し

遠き日のベトナムのこと思ひいづイラク戦争のなりゆきみれば

サッカーアジア杯

先に行われたサッカーアジア杯では、中国の若者が反日のブーイングを飛ばした。大連や重慶ならともかく、北京での試合でも起こったのは、私にとって少なからず衝撃的であった。

国と国とが互いに礼節を守るこの当然の行為が、まさか中国の首都北京で破られるとは思って
いなかったからだ。

かつて、日中国交が成立し、両国がお互いのことを立てながら、文化や経済の交流に精魂を傾けていた頃、私の出逢った中国人はみな謙虚で尊敬に値する人たちばかりであった。それが、最

近はどうだろう。中国の経済成長に伴い、日本国内において事件を犯す中国人の若者や中国マフィアの暗躍などが目立つようになってきた。

ここらで、両国はまた初心に立ち返り、友好関係を確認し合う必要があるのではないだろうか。そして、中国側からも不誠実な目的により日本に渡航しようとする者達を厳しく取り締まるなど、多方面からの協力関係を再構築していく必要があるのではないか。

このブライング騒ぎがあつて、私は、八月二十九日から計画していた中国渡航を取り止めた。サッカーくらいでと言つ人がいるかもしれないが、この騒ぎの奥にひそむ日中関係の変容を心から憂つるからである。

事なかれ主義で、あるいは理由なき中国偏向では、両国の関係は一向に改善しないと思う。じっくり、ここで日中友好について考えてみたいと思う。

赤心亭の朝

窓の外は、すがすがしい秋晴れです。ちょっとひえびえとした空気が入ってきます。

宮の境内には、大きな楠の老木がありますが、もう葉も長けてしまつています。来年の四月下旬の頃には、瑞々しい若葉をみせてくれることでしょう。

いま、私の職場、大分豊寿苑ではユニットケアが膠着状態にあります。メニューをどのよう

整理していくのか、この点で意見が集約しきれしていない、というのが実情です。

しかし、この時こそがケアサービスを向上させる一つの正念場でしょうから、諦めずじつくりと取り組んでいきたい、いまはそう思っています。

いつも、この亭に朝を迎えるたびに、一体私はどのような福祉へと進むべきなんだろうか、と思うことしきりです。

心の中の「福祉というアイデア」がまだ熟していないのでしょうか。ともかく、愚痴はやめて前へと歩むのみです。それしかないのだと思います。

師走

忙しい忙しい

ともかく余裕がない

師走はいつもなぜこんなに

余裕がないんだろうか

ひよっとすると

そう思い込んでいるだけじゃないかと

振り返ってみた

やはりそうだった

ぼくは大きく息を吸い込んで

一分だけ瞑想した

すると

しーんとして

静かな世界がそこにあった

忙中閑の意味は

こんな単純なこともしれない

あとがき

このエッセーは、私にとって第一作目の「風立つ村」につづく第二作めのものとなりませぬ。タイトルの「愚人憑録」とは、人生を愚かに稚拙に歩いている自分が、世の中のことに対し愚痴をこぼしたり、憤懣をぶちまけたりして、辛うじて日々を過ごしているのだ、との意味合いによるものです。

かつて地方公共団体に所属していた頃の小文と、いま所属している介護老人保健施設、大分豊寿苑にて書いたものが順不同に混じっています。それはそれで読んでいただければ、分かっていただけると思います。

二つの時代を生きている私ですが、微妙にトーンが変わっているかもしれません。

それは、私にとって、いわば虚の世界から実の世界へと転身を図ったのであり、当初は不安であったにせよ、次第にその内容に重みが加わっているはずだと、ひそかに期待しているのです。いま、社会、世界は、未曾有の変革、流動の時代にさしかかっています。日々の生活のなか、いろんな辛いこともあるでしょうが、みなさんも時にはこうして憤懣をぶちまけ、その中から次代へ歩むパワーと希望を見いだしていただきたいものです。

では、みなさんのご活躍を祈ります！

二 五年六月三十日 田辺井記す

書房アンテクス理念

近年、社会が経済至上の傾向を呈して久しく、この間人々は生産より消費へ不易より流行への歩を速めてまいりました。そして、時代の流れは、わが国に営々と培われてきた精神文化をも呑み込み、いまや物的価値尺度が社会に遍く浸透しております。

一面、かすかながら新たな兆しもうかがわれます。明らかに不利な立場から正義を貫く法律家や、人道援助に生涯を掛ける活動家、また身体の不利益を反転し周囲に勇気を与える青年や、地域社会への奉仕に地道に取り組む個人の活動、等々であります。

こうしたなか、私たちはここに、ヒューマンあふれる社会の構築を高く掲げた書房アンテクスを弊社内に興し、地方にあつて文芸、哲学、種々の芸術等に励む人々の活動を、良書の普及や刊行等を通して支援すべく歩み始めました。身近に営まれる文化活動を全国の同胞とともに共済し、新しい文化の形成へつなげよとの熱意からであります。この趣意が理解を得られ、新しい時代の潮流となるよう念願してやみません。

二 一 一 年 六 月

代表社員 田邊誓司

【著者略歴】

たなべ せい

田辺 井（本名；誓司・歩道短歌会同人・現代歌人協会会員）

略年譜

- 1952年 大分県国東市安岐町両子1910番地に生れる。
1975年 長崎県立国際経済大学を卒業、大分県に27年
余在籍する傍ら、地域政策論の研究に努める。
1992年 大分県医務課医務係長を3年務める。
1995年 東京事務所企画建設第二課長を3年務める。
2000年 農政企画課課長補佐を2年務める。
2002年 医療法人敬和会介護企画部長（大分豊寿苑事務
長・社団法人大分県老人保健施設教会事務部会
副部会長1期）を約5年。
2007年 行政書士田邊法務事務所を開業、現在に至る。
2011年 会社・国際化支援事業所アンテクス合同会社を
設立、同代表社員就任。同社内に書房アンテク
スを設置（上記の間、歌人・エッセイスト・地
域政策評論家として活動）。

愚人憑録（ぐじんまんろく）

平成17年7月1日初版発行（聴風舎）

平成23年7月1日第2版刊

著者 田辺 井

発行所 書房アンテクス

〒192-0907 東京都八王子市長沼町178番地42502号

（TEL代表042-697-8777）

電磁製作 書房アンテクス

P1000E（本体953円＋税）